

第2回 バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会 議事要旨

1 日時 平成18年5月22日(月) 13:30~17:00

2 場所 三田共用会議所

3 出席委員等

(1) 委員

前田委員(座長)、相原委員、姉崎委員、江川委員、岡田委員、坂元委員、下田委員、
素川委員、藤岡委員、藤川委員、義家委員、池田委員<代理>、竹花委員、小林委
員

(2) オブザーバー

田代内閣府参事官、有松文部科学省スポーツ・青少年局青少年課長

(3) ゲストスピーカー

魚住絹代大阪府教育委員会訪問指導アドバイザー、柳沢治通NTTドコモモバイル
社会研究所副所長、遊橋裕泰NTTドコモモバイル社会研究所員

(4) 事務局(警察庁生活安全局)

巽長官官房審議官、大木少年課長、坂情報技術犯罪対策課長、中川少年保護対策室
長

4 議事

(1) 開会

(2) 魚住絹代氏の説明・質疑

【魚住氏】今日は、子どもたちと接する中で日ごろ感じていることをお話しさせていただこうと思って参りました。また、各界の第一人者の皆様のお話を伺わせていただくことを貴重な機会と楽しみに参りました。よろしく願いいたします。

最初に、私自身の活動についてお話しいたしますと、私は、以前、少年院の法務教官をしておりました。少年院に来るのは、事件を起こした14歳から19歳までの少年です。最初は、どんな子も、なぜこんな事件を起こしたんだろうという疑問からスタートします。少年院の生活の中で、過去を振り返る中でそれがひもとかれていくんですけども、そこにあったのは、心の傷を負いながら育ってきた歴史でした。愛情不足や自己否定の中、身につけてきた生活習慣、ゆがんだ認知や対人不適応、それがどう事件に結びついていった

のか、そこには必ず道筋がありました。その壮絶な人生に衝撃を受けると同時に、育った環境がその人の人生にいかに関与しているのかということを目の当たりにしてきました。

しかし、そんな子ども適切なかわりや手当てが施されると、次第に自分を取り戻していきます。その驚くほどの変化に、子どもの持つ生まれ変わる能力、生まれ変わりの力を教えられるとともに、一人一人の育ちを守ることを痛感させられました。子どもたちの育ちを守るためにも、少年たちから教えられたことをいかにしたい、そんな思いから、2000年に法務教官を退官しまして、5年前からは、大阪府の小・中学校にかかわっています。具体的には、相談室での相談活動や家庭訪問などが主で、早い発見と手当てをという思いで、子ども、親、教師の支援をしております。

まず初めに、今の子どもたちに起きていることを大まかに知っていただくために、学校現場での子どもの姿をお話しさせていただこうと思います。まず見えてくるのは、授業や集団場面での基本的な社会的スキル、ルールが身につけていないということです。授業中は静かに座って授業を受けるものという大前提がどこへ行ったのかというぐらい、授業中平気で立ち歩く、堂々と教室から出ていく。また、持ち込みを禁じられている携帯やウォークマンで、授業中にメールをやったり、音楽を聞いたりということも見られます。全般的に、注意や指示が通らず授業が成立しないということがもはや珍しくないんです。体育館での集会場面などでも、黙ってじっと座っていません。忍耐、集中力、規範意識、感情や行動のコントロールの欠如など、集団生活を送るための基本的な社会性を獲得できていないんです。

次に、よく言われるところの対人関係の未熟さです。気持ちや要求を上手に伝えられないというコミュニケーション能力の不足だけでなく、傷つけることを平気で言ったり、相手の気持ちがわからないという共感能力がさらに問題をこじらせています。子どもたちの間では、「きもい」、「うざい」、「うせろ」、「死ぬ」、「殺すぞ」などというような言葉が日常的に飛び交っているのをご存じでしょうか。口ぐせのように深い意味を持たないことが多いんですけれども、それでも自分が言われると深く傷つくんです。そこから対人関係を学んでいくというよりも、やられたらやり返すという、傷つき、傷つけ合うという危ういバランスの中で生きています。

また、女の子は、グループをつくる傾向があるんですけれども、関係を築いていくというよりも、自分の居場所を守ることに必死です。仲間外れにされないために陰で悪口を言ったり、示し合わせてだれかを仲間外れにしたり、日々移ろう関係に不安と傷つきを抱え

ながらしがみついています。

一方で、そんな過酷な人間関係に立ち向かえない弱くて繊細な子どもは、傷つきを回復できず、やがて不登校になり、さらに引きこもりに発展していくことも少なくありません。中でも、傷つきからなかなか回復できない子どもに見られるのは、自分の思いにとらわれやすい傾向です。自分の思いと一致すれば最高になるんですけども、自分の思いと違えば、途端に最悪になってしまいます。自分と他人とは違うという当たり前のことが受け入れられない。過度に自分に執着する子は、傷つけられると自分への重大な侵害のように受けとめてしまって、思い返しがきかなくなってしまいます。自分を守るために、かわりを避ける子もいれば、激しい怒りとなって相手を破壊するほどの攻撃性へと発展することもあります。こういった回避か攻撃かという両極端で短絡的な反応は、最近の子どもの重大事件でも感じるところです。ですが、日ごろの子どもたちの様子から、そういうことがいつ起こっても不思議はないという危険を感じております。つまり、「死ね」という口ぐせが、いつ現実的な意味を持ってもおかしくないところで暮らしているんです。

そんな中、去年、私がかかわっている市でも事件が起こりました。17歳の少年が、母校の小学校で教師を殺傷した寝屋川事件です。この少年は、小学校時代、友達関係がうまく築けずいじめに合っていたこと、そのとき担任の先生が助けてくれなかったからということに犯行の動機に語っていましたが、実際のところはまだこれからひもとかれていくことになると思います。中学校時代は不登校ぎみで、引きこもってゲームやネットに明け暮れていたといえます。

現実での生活がうまくいかないと、今の子どもたちは、そこに粘り強く向かい合って解決しようとするよりも、むしろ現実を回避し、思い通りにコントロールできるゲームやネットまたメールにのめり込んでいきやすい環境に置かれています。現実離れした刺激や情報で万能感ばかりを膨らませて、過激な攻撃性を強めてしまうこともあります。寂しさを抱えた女の子は、短絡的に愛情とお小遣いを得ようと性被害に遭ってしまうことも起こっています。

そんな今の時代に育つ子どもたちに起こっていることに、私たち大人が対応し切れていないのではないかという危機感から、子どもたちのメディア利用の実態や影響を調査する必要を感じ、昨年夏に大規模な調査を行いました。

大阪、長崎、東京の全10校を対象に、質問紙形式による調査を行いました。中学生2,381人と、その保護者を対象に行い、生徒2,149名、保護者1,406名より有効回

答を得ました。質問は、単なるゲームやネット、メールなどのメディアの利用状況だけでなく、どういった子がどういう影響を受けやすいかを分析するため、養育、家庭環境、生活スタイルや行動パターン、性格、認知の傾向やその長期的な変化などをカバーする内容としました。今日は、メールをメインにということですので、その中から、そんな子どもたちのメール利用の実態や背景を見てみましょう。

こちらは、中学生におけるメール利用の実態です。上のグラフは、地域による利用率の違いを示しています。各棒グラフは、東京、大阪、長崎、そして全体における割合を示しています。メールをやっている子は、全体の67%です。また、都市部に多い利用の傾向が見られます。左下のグラフは、男女別の利用率を示しています。女子にメールの利用の多い傾向が見られます。これは、男性よりも対話やコミュニケーションに重きを置く女性のジェンダーの特性が関係していると思われます。また、学年が上がるにつれて利用率が上昇しております。

ただし、今回の調査でいうメールは、携帯に限定した質問にはしていません。なので、このメールにはパソコンでメールをやっている子も含まれております。どのパーソナルツールを選ぶかということよりも、どんなつながり方を求めるのかに主眼を置いたからです。メールとネット、それぞれのつながり方には傾向の違いがはっきりとあらわれています。

次に、メールの利用頻度ですが、左のグラフは、1日にメールをやりとりする回数分布を示したものです。今回の調査での利用頻度は、「全くしない」、「5通以内」、「10通以内」、「20通以内」、「50通以内」、「50通以上」で設定しました。1日50通以上やりとりすると回答した中学生は、全体の9.3%、1割弱です。50通以上は、上限なしですが、よくやっている子から日ごろ聞くところでは、1日200件、300件という子はざらにおります。

また、都市部、女子にヘビーな利用が多いという傾向は、ここでもあらわれております。例えば、この緑色のグラフが男子なんですが、男子では「全くしない」と答えた子が半数近くいるのに対して、女子では約16%しかいません。

次に、最近、子どもだけでなく、大人の間でも問題になっているメール依存の状況について見ていきたいと思えます。今回の調査で比較的多く見られた依存の症状としては、以下のようなものがありました。括弧内の数字は、メールを1日50通以上やりとりする中学生における各症状の出現頻度です。「できないとイライラしやすい」、22.9%、「睡眠・生活リズムの乱れ」、29.8%、「学校のことがおろそかになる」、12.9%、肩が凝

る、疲れやすいなどの「身体症状」、11.1%です。

今回の生徒の調査は、学校時間内に行われました。なので、必然的に学校に来ている子が対象となっておりまして、当日学校に来ていない子については調査できておりません。休みがちな子では、重度のメディア依存が見られることがあるんですけども、特に遊び型の不登校のケースでは、しばしば深刻なメール依存を伴っています。暇な時間は常に携帯をいじっていて、携帯がないと落ち着かない、寝るときも携帯を抱いて寝るという子も珍しくありません。携帯がとめられた途端にパニックになり、大暴れした子もいます。携帯がないと生きていけないと思ったと言います。

次に、メールの利用頻度が高い子の特性について見てみましょう。ここに示しているのは、メールの利用頻度と関連が認められた項目です。まず、対人関係に関するものでは、「友達が多く、外でよく遊ぶ」、「活動的で好奇心旺盛」、「対人関係にどん欲で社交的」、「両極端に変動しやすい」、「注目されるのを好む」、「高い共感性」、「他者への依存傾向」、「家族より友達を重視する」、「いじめたことがあると答えた子の割合が高い」です。

上のグラフは、一番熱中するメディアの種類と、「対人関係にとっても積極的」と答えた保護者の割合の関係を示したものです。メールに最も熱中している子は、対人関係にとっても積極的な傾向が見られました。

また、下のグラフは、横軸がメールの利用頻度、この緑の棒グラフがほとんど遊ばない子の割合、赤の棒グラフが3時間以上遊ぶ子の割合を示しています。メールをよくやっている子ほど外でよく遊ぶ傾向が見られます。そもそもメールというツールは、携帯やパソコンを媒介にして直接相手とやりとりをするというものですから、よく利用する子は対人関係が活発で、社会的能力も高いと考えられます。顔が見えない相手とやりとりするためには、相手の気持ちを読み取る能力が必要になってきます。また、「困っている人がいたら助けたい」、「困ったことがあるとすぐ人に相談する」と答えた子の割合も高く、メールをよくやる子は情に厚く、人に甘えたり頼ったりすることが多いようです。その一方で、「いじめたことがある」と答えた子の割合が高かったことから、切ったりつながったりという両極端な激しい対人関係を持っていると言えるでしょう。

このグラフは、「一番大切なものは何ですか」の問いに対する答えをまとめたものです。緑の棒グラフは全くメールをしない子で、赤の棒グラフは1日50通を超したやりとりをする子です。全くしない子では、一番大切なものが「家族」と答えているのに対して、50通を超えるやりとりをする子では、「友達」に逆転しています。

下のグラフは、メールを利用する頻度と、友達になったり絶交したりが激しいと答えた子の割合の関係を見ていますが、50通以上する子では、対人関係が変動しやすい傾向が見られます。

次に、認知や感情、行動の特性ですが、メールを多くやりとりする子に見られたのは、完璧か最悪か、親友か絶交かというような二分法的で両極端な認知、喜怒哀楽の激しさ、また上のグラフで示しておりますように、あまり考えずに行動してしまうという気まぐれで衝動的な面、下のグラフにある元気と落ち込みの差が激しいという気分のアップダウン、また暴力に対して肯定的な面、対人不信が認められました。

これらの特性を持つ子がメールに引きつけられやすいのか、メールというツールがこれらの特性を強化しているのかはわかりませんが、個々のケースで見ると、両者の悪循環があるように思います。メールに依存していく子たちは、現実には彼氏がいても、メル彼をせっせとつくりまわります。それには理由があるんです。彼女たちは、口をそろえたように「だって、いつ切れるかわからんやん」と言います。人を求めているのに、人が信じられないから現実には彼氏ができるとう不安になってしまうわけです。あすその関係が終わるかもしれないと思うと、そうなったときに耐えられないという思いが先に来るわけです。傷つかないための準備、保証としてたくさんのメル彼が必要になっていきます。しかも、自分が不信からメル彼をつくってしまうので、彼氏にもそんな浮気相手がいるんじゃないかと疑ってしまいます。その不安を感じたくないがために、またメル彼をつくってしまうというスパイラルに陥っています。人が信じられず、気持ちの変動が激しい彼女たちにとって、私にはこれだけの人がいるという、いつでも連絡がとれる手の中のメル友が必要になってくるわけです。でも、そのストックがある限り、ほんとうに安心した関係はできないわけです。

では、その対人不信はどこから来るのか。そのかぎは、親子関係にあるようです。右のグラフは、保護者が回答しているものですが、子どもが一番熱中しているメディアと、就学前の愛情不足の関係を示したものです。メールに最も熱中している子は「就学前に愛情不足があった」と保護者が答えている割合が高いです。メールをよくやっている親子関係の特徴として保護者の回答で見られたのは、「反抗的な傾向」、「幼少期に愛情不足があった」、「親子の会話の乏しさ」でした。一方、子ども本人の回答では、「褒められるよりしかられることの方が多かった」などの否定的な養育体験や、「親に甘えさせてもらえなかった」という不遇感です。また、「親にわかってもらえていない」と答えた割合も高いものでした。

子どもたちを見ていて思うのは、対人関係の基盤が親子関係にあることです。メールにのめり込む子は、この基盤がとても弱いことを感じます。かかわる中で親の事情を知るわけですが、両親の不仲や金銭トラブル、精神の不安定、親の価値の押しつけ、親自身が自分のことに夢中で、子どもはほったらかしといったようなさまざまな背景があります。子どもも、そんな親の事情をよく知っているのに、今さら求めようとしません。活動性の高い子どもは、家庭で得られない愛情や承認欲求などの不遇感をむしろ違うところで、家庭以外のところで満たされようと外に向かっていきます。そこでさまざまなトラブルに巻き込まれる事態も容易に起こることになります。

このように、根底にある愛情飢餓が、思春期以降、他者への依存に向かい、信頼関係の基盤がないところで不安定な対人関係となって、さらにそこで愛情飢餓を生み、他者へ依存するという構造があります。そして、今、瞬時に相手とつながれるメールというツールが、この悪循環を加速しているわけです。メール依存の子は、その活動性と好奇心旺盛、他者への親和性や、非行や犯罪の危険にも無防備になりやすい傾向があります。薬物依存や売春など、愛情飢餓型の非行と構造が重なる部分も大きいです。

次に、中学校で実際に遭遇する携帯をめぐる非行や問題行動を見てみましょう。学校で活発に交流できる子は、身近な同級生や先輩などを恋愛対象に求めていく傾向があります。面と向かって言えない言葉も、メールやブログでなら書いてしまうので、先輩とでも関係が急速に発展しやすいです。しかし、実際につき合えたとしても、見捨てられ不安や対人不信から、安定した対等な関係が築けないことが多いです。

例えば、好きだからいいやんと関係を求められると、ほんとうは嫌なのに、気持ちが離れていくのが不安で拒めないでセックスしてしまったり、あるいは常に彼氏や好きな人がいないと落ち着かない恋愛依存症の子の中には、エッチしてからつき合うといった、つき合うための方便にしている子もいます。さっきまで会っていたのに、家に帰っても相手の気持ちや行動が気になってメールをします。安心するためなんですけれども、連絡がとれないと逆に不安を強めてしまいます。

これも、メールというツールがあるからで、すぐコンタクトをとれる便利さが、明日まで待つという忍耐力や衝動を抑えられない傾向を強めてしまうように思います。それは、家の中だけでなく、学校でもその状況になっているわけです。授業中でさえも、気になってメールを送ってしまうといった状況があります。当然、生活リズムが狂っていきまじ、そんな関係に気づかないうちに疲れていきます。

また、仲間内では、いろんな情報がメールで瞬時に回ってきます。例えば、「ユキの彼氏、後輩のアヤと今日、仲良くどこどこで話していたよ」なんて余計な情報から、あるいは写メールでエッチな姿が回されてくることもあります。あるいは、「ユキちゃんとのエッチ、そろそろ飽きたって言ってたらしいよ」なんて信じられないことまで平気で飛び交うわけです。相手がそれでどう思うかなんてもうおかまいなしで、当然深く傷ついたり、トラブルになることもあります。人間不信をより強めて、現実よりも理想化した関係を求めて出会い系サイトに入っていくということもあります。

また、漫画や仲間内でのゆがんだ性知識には驚くものがあります。どういうものかといいますと、例えば冷たい水に腰まで浸かったら中絶できるらしいとか、エッチした後、膈内をコーラで洗ったら殺菌作用で精子が死ぬらしい、あるいは、同時に2人の精子が入れば妊娠しないなどなどです。これを本気で信じてしまう子どももいて、当然妊娠や性病などの危険もあるわけです。

一方、男の子の中には、アダルトサイトやAVビデオなどから、ゆがんだ性知識を学んでいて愕然とすることがあります。複数の性経験をした男の子の中には、自分が何人の女の子とエッチしたかということ自慢する傾向もあります。「女の体は3カ月で飽きる」とか、「あいつとのエッチはよかった」とか、「彼女とけんかしたら、後輩を呼んでエッチしてる」などと、大人も顔が赤くなるようなことを言うてのけます。性は女性を征服するためのもの、男の権威のあらわれのように錯覚していたり、むしろそれが常識のように信じているんです。実際、それで傷ついてしまっている女の子たちがいるわけです。それがどういう意味があるのか、女の子の心と体、性について話すと、男の子たちは真剣に聞くんですけども、ゆがんだ性文化に汚染されている子どもたちをどう守っていったらいいのか頭を抱えてしまいます。

一方、同年代でのつき合いがうまくできない子は、成人異性に移行していきやすいです。実際、どういうふうにつき合っていくかといいますと、「友達探し」というサイトに18歳以上と偽ってアクセスします。身分証明など何のチェックもないわけで、「18歳以上」を押すだけで簡単に中に入れます。そこで年齢や身長、体重、タイプ、地域などを入力して登録しますと、1日に50件以上の写真つきメールが日本中から来るそうです。そこには、「愛してるよ」、「かわいいね」、「慰めてあげるよ」などと、寂しい女の子を簡単に舞い上がらせてしまう大人の男たちがうようよいます。寂しい女の子たちは、自分を認めてくれる言葉に飢えています。その中から、話を聞いてくれそうな好みの男を選んで連絡をして

いくわけです。

ケースでお話しします。ある少女は、朝、制服を着て登校した後に、24歳のトラック運転手とトラックの中でセックスして登校してきていました。彼女が私に打ち明けたのは、妊娠の不安があったからです。「『朝しか会われへん』って言うし、『こんな愛したことはない』って言うし、『結婚しようよ』って言うし」、その言葉を信じてうれしくて毎朝制服で会っていたと言います。ですが、名前はヨックンとしか知らないし、生理が来ないと思ったころから連絡もとれなくなってしまったと言います。彼女は、母子家庭で姉と3人暮らしですけれども、家でも居場所がなく、学校でも、友達が多いんですけれども、しょっちゅう友達になったり、絶交したりという不安定な関係を繰り返していました。

その後、妊娠は否定されましたけれども、彼女は、小学5年生から携帯を買ってもらって、メールを通じて知り合った人たちとエッチをしてきたことを話しました。初体験は小学6年生、相手はメル友の大学生で、カラオケボックスでやったと言います。それからも寂しくなったり、お小遣いが欲しくなると援助交際をしていたと言います。口でやるだけで5,000円、体で2万円。友達にも勧めて一緒にやっていたこともあって、一度車の中で、行為が下手だといって顔を殴られたこともあったそうです。いつも明るく振る舞っていた彼女が、実は小学生のころからそんな生活を送っていたのかと思うと、胸がふさがれました。

また、出会い系の相手を利用しようとする子もいます。中学2年のある女生徒です。彼女は、27歳のIT系の男、このITというのが出会い系サイトで多いんですが、ITと言えばもてると思っているのかもしれませんが、意外と中学生の女の子は、「先生、ITって何?」とか聞くんです。まだ中学生で理解できていない子が多いんですけれども。このIT系の男と親公認でつき合いを始めました。この男、「IT男」と呼ばせていただきます、どうも気が弱く、同年代の女性とつき合えないような人でした。それは彼女にとって都合がよく、車で遊園地やファミレスに連れていってくれたり、おそろいのペンダントを買ってくれたりするわけです。27歳の男にとって、一緒に遊んでセックスさせてくれたら、それくらいのことは何でもないことなんでしょうけれども、愛情に飢えた中学生の女の子にとっては夢のようで、まるでお姫様になった気分です。そんなつき合いを続けていたら、同年代の子らとのつき合いが幼く思えてくるだけでなく、だんだんこのIT男ももの足りなくなってきました。そのうち、別の男ともつき合った方がもっといろんな楽しいことができるんじゃないかと欲望を抱くようになるわけです。

行動力のあるその子は、IT男はかっこよくないからとグレードアップを図って、次はホストだと言います。また写メを見せるんですけれども、このホスト、絶対に会ったらだめだよと言っていたんですけれども、メールをやりとりするだけで会わないと言っていました。このホスト、実際に会うと、美人女性の写メールをたくさん見せて、いかにもナンバーワンホストのようだったそうなのですが、電車に乗せられて知らない町を歩いている中で、突然ホテルに引っ張られてしまいます。その中でも、いかにも手なれたようにエアコンをつけたり、音楽を操作したりするうちに、突然電話が鳴ったそうです。その電話に、そのホスト男は中国語で話を始めたと言います。その豹変した姿に彼女ははっと思い、恐怖がピークに達して、服を脱いでいないことを幸いに逃げ帰ってきたと言います。彼女は、ホストというのは口実で、ほんとうは売り飛ばそうとしていたんじゃないかと恐怖を語りました。好奇心旺盛で、愛情に飢えた女の子たちは、そこにある危険を知っていても、瞬間的にも愛されているという実感を求めてのめり込んでしまいます。それが取り返しのつかないニュースになるかの境は、運だけと言ってもいいくらい危ういものです。

また、メールがきっかけとなって、家出や危険な交友関係に発展していくこともあります。同じ趣味や趣向を持ったメル友と知り合う中で、そこを居場所にし、家出やオーバードーズ、リストカットなど、危険な行為を模倣していくこともあります。身近に出会えるはずの距離や数を超えて、遠隔で不特定多数の人と容易に結びついてしまうので、親が把握することも難しいです。

また、先ほどの男の子にも見られますけれども、アダルトサイトの利用も問題となります。アダルトサイトをよく利用すると答えた子は全体の2.4%でしたけれども、メールを50通やりとりする子では5.3%、3時間以上ネットをする子では10.8%でした。こうしたアダルトサイトなどに日々アクセスしている子たちは、ゆがんだ異性観や知識を日々摂取してどんどん変化していきます。

好きなことを好きなだけしたい好奇心旺盛な子どもたちは、ブレーキがきかずどんどのめり込む結果、携帯代も途方もない額になることもあります。実際、5万、6万、果てには10万、20万という額を親が払っているケースもあります。どこの学校でも、携帯電話の指導の難しさには頭を抱えています。規則としては禁止しているところが多いんですけれども、実際には持ってきている子が少なくないわけです。見つけたら没収するけれども、徹底されていないから、持っていない子や持ってこない子は、不公平感とか不満を募

らせやすいです。先生の中には、「君たちは持ってきていないと先生は信じています」というような指導をする人もいますが、子どもたちは、援交も携帯もみんなやっているのに、大人は自分が知らなければいいわけでしょと、表面だけで生徒に向かい合う偽善者と見抜くわけです。

規則が有名無実化し、規則を守ることが絵そらごとのようになってしまう現状があります。大人の本音と建前に敏感なのが思春期です。しかも、その本音の向こうにこんなふしだらな世界があるのを知っていて野放しにしている社会の現状に、ますます大人に不信を抱いてしまいます。むしろ、向こうの世界の方が本音の世界で、そちらの方が真実だと感じてしまう子もいるわけです。また、寂しさを抱えた子たちにとって、正しいことよりも、自分を理解してくれる、相手してくれることの方が大事なんです。

援助交際するうちに、制服着てきてとか、写真撮らせてとか、透け透けパンティーはいてきてとか、いろいろなおねだりをされることもあります。大の大人が中学生の自分にパンティーをせがむ姿は、子どもにとっては最高にこっけいで、自分の価値が変に大きくなったように感じられ、大人と対等に渡り合っているような錯覚に陥ります。さらに、大人を軽蔑するようになり、そんなことに喜ぶばかなおやしをだましてやれと野心を持つ子もいます。そこまで行くと、もうすっかり犯罪予備軍になってしまっています。しかし、これも、もとをたどれば大人や社会のだらしなさの結果とも言えるように思います。思春期の子どもは、大人が考える以上に現実的で、大人の出方や反応を見て対応しているんです。

これまで見てきましたように、子どもたちの変化や、メールやネットの問題が意味するのは、今の社会に育つ子どもの本来の育ちが阻害されているということです。そんな子ども本来の育ちを守るためにどうしたらよいかという視点で幾つか提言をさせていただいてまとめにしたいと思います。

メールに依存し、恋愛依存や対人関係依存にのめり込んでいく背景には、愛情飢餓や不安定な親子関係があります。その危険から子どもを守る上で、家庭に安心できる居場所があること、親と信頼してつながっていることが防波堤になります。また、メールなどに過度にのめり込んでいく子の最も多いきっかけは、現実場面でのつまずきです。対人関係も含め、社会で自分をいかして生きていくためには、対人関係や社会で生きていくスキルをしっかり身につけさせることが必要です。子どもは、遊びや体験の中から社会で生きて行くための力を身につけていきます。安心して外で遊べる環境を取り戻すということが必要です。

そうは言っても、社会環境や家庭のスタイルが変わってしまい、以前は普通に育つ中で自然に身についていた社会性が、自然には身につけられなくなってきています。子どもが育つ場所は、主に家庭、学校、地域です。家庭や地域でうまくその基盤を身につけられずに育つ子どもが学ぶ場所というのは、まさに学校しかありません。しかし、今学校で起きている傷つき、傷つけ合う日常的な対人関係は、子ども全体的な育ちの問題にもかかわっていることです。学校で人づき合いのルールや、人を傷つけない要求の通し方、自分と違う他人を認め、どうつき合うのかななどの具体的な訓練の授業が必要になっていると思います。その際、メールやネット利用に潜む危険性を知らせて、メディアリテラシーを育てることも重要です。

このように、子ども自身のスキルや耐性を高めることも大事ですけれども、すべての大人が良心的に子どもに接するのではないという現実がある以上、これだけでは不十分です。子どもを現実的に守るためには、社会として対策を講じていくことが必要になります。その具体的対策としては、子どもの有害サイトへのアクセス規制を厳格にすること。また、子どもを利用・搾取した犯罪の罰則を強化することなどが早急に求められます。

もちろん法律や規制を強化することだけで済む問題ではないことは言うまでもありません。私たち大人一人一人が、大人としての自覚を持って、次代の宝である子どもを育てていくという気持ちを共有することが何よりも大切だと思います。私たち大人が、まず大人として自覚とけじめを持ち、子どもの育ちを守るという視点になれば、おのずと子どもが安心して育つことができる、みんなが住みやすい社会になっていくのではと思います。

その祈りを込めて、私からのお話を終わります。

【座長】どうもありがとうございました。それでは、今のご説明に関して、何かご質問がありましたら手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。

【A委員】2つほどなんですが、一番最初に「いま、子どもたちに起きていること - 学校現場から - 」というのがありましたよね。この子どもというのは、どういう年齢の子どもを指しているのでしょうか。小学生から高校生まで全般的にということなんでしょうか。それとも、今回調査をした中学生のことということなのかということがまず1点と、それからもう1つ、中学生の調査の中で、外でよく遊ぶというのがありましたけれども、この遊ぶというのは何を、多分鬼ごっこをやっているんじゃないと思うんですけども、どういう遊びなのかもしわかれば教えていただければと思います。

【魚住氏】まず1つ目の、学校現場で今子どもに起きていることということで、小・中学

校の方にかかわっております、小学校、中学校からこういった傾向が見られます。普通は、社会性というものは年齢を追うごとに身についていくものなんですけれども、小学校でできていたことが中学校でもっとできなくなる、授業中にもっと騒いでしまうといったような状況が起きています。

もう1つの、外で遊ぶということなんですけれども、こちらの方は、質問の設定で、「1日のうちでどれくらい外で遊びますか」という項目と、「家の中で遊ぶことの方が多い」というような設定をほかにもつくっております。なので、室内で遊ぶのか、外で遊んでいるのかというような違いで見えております。具体的な遊びの内容については問うておりません。

【B委員】教えていただきたいのが、メールの利用頻度で、長崎とか大阪、東京で、都市部で高いというのが最初にあったかと思いますが、そのほかのところでは非常に根本的な問題を多数ご指摘いただいているほどと思っています。地方と都市部で何か差異があったようなことはございますでしょうか。

【魚住氏】利用時間などは、地域差があったものもあります。また、例えば対人関係の持ち方で、困ったことがあるとどうするか、あるいはけんかしたらどうするかというときに、東京、大阪では話し合ったりということが高かったりするんですけれども、長崎では、どちらかという我慢するという傾向が高く見られるということが地域の特性として見られました。

【B委員】携帯のようなツールに関しては地方差がなくなってきているのかなと推測していたのですが、先生の感覚では、地域差はございますか。

【魚住氏】今回のこのメールの調査、携帯電話に限ったものではないんですけれども、ちょっと今回の調査では違うんですが、例えば長崎の離島などで行った調査で、私のやった調査ではないんですけれども、パソコンのネットへの利用率が東京、大阪と比べて非常に高いといいますが、長時間やっている子の率が高い傾向が見られまして、なので瞬時に全国どこでもつながれますので、もうそういったところの格差はなくなってきているのかなという印象を持ちました。

【C委員】今のご説明以外に、関連として著書を読ませていただきまして、それとの関連で今日、1点確認したいことがありまして、「いまだき中学生白書」というのを読ませていただいたんですが、ゲーム族、メール族、ネット族という分類をなさっていて、そのメディアの種類ごとに影響を述べておられますね。今日のもこれでその一部が説明として出たと思うんですが。ちょっと私の方で気にしていますのは、この連続性なんです。ゲーム族

は、早い段階で、幼児段階でもう入っていくと。そのゲームをしていた子が、しかしメールを今度はしなくなるかというわけではなくて、メールもする子がいるわけです、当然続けて。そして、ネットの発信もしていく。この連続性で僕の方で注目しますのは、ゲームを盛んにしていた子が、メールや、メールの一種としてのチャットをする場合に、非常にゆがんだ発信の仕方になっていくという傾向をとらえていまして、連続性について意識されたのかどうか。また、今でも何か問題意識をお持ちなのか、そのあたりをちょっとお聞きしたいんですが。

【魚住氏】ゲーム族、メール族、ネット族というふうに「いまどき中学生白書」という本では分類しておりますけれども、当然子どもたちはゲームもメールもネットもできる環境にありますので、いろんなものを複合的に利用しております。今回そのように分けたのは、それでも特性を見たかったということがあります。

【C委員】あと、年齢ですね、強調されたのは。

【魚住氏】ゲームの開始年齢が早いほど、後にゲーム依存になる子が高いですとか、小学校低学年にゲームの利用時間が長い子ほど、また後々メールを長時間利用する子が多くなるといったような関連性は見られました。

【C委員】メール族の中には、メール族の段階では、女の子が活発に外向的にこれを使っていくというような記述もあったわけですが、それに対して、男の子がゲームを早い段階から始めて、女の子と比較すると、もしくは外向的なメールの使い方をすると比較すると、どうしても内向的な傾向になるとかっていうような感じはありませんか。

【魚住氏】内向的な感じになるというのは、だれが。

【C委員】内向的な、メール、ネット上でのつながり方を、最初にゲームからスタートして、ゲームではまった子がメールとかチャットをした場合に。

【魚住氏】幼少期にゲームにかかわっていた子が、だんだんとメールに移行していくか、あるいはよりゲームに強く依存していくかという傾向が分かれていきます。メールの方に移行していく子は活動的な傾向、ゲームの方に依存していく子は対人関係に消極的な傾向が認められました。

【C委員】メールのやりとりも、非常に内向きになっていくというような、要するに、仲間、新しい友達を、メル友とか未知の友達を求めるというよりは。

【魚住氏】その相手までは調査はしてありませんが、ただ、メールをよくやる子は、友達の人数が多いという傾向は出ております。その一方で、50通以上やりとりしている子で

も、友達がいないという子もいるわけです。なので、そういった子は、おそらく現実での友達ではない、そういった顔の見えない、知らない相手とアクセスしているということは考えられます。

【D委員】大規模な調査をされて大変貴重なデータだと思うんですが、1つ気になりましたのが、メールをよく利用している子どものほうが対人関係が不安定であるというデータを示されて、それはメールの利用が対人関係を不安定にしているのか、それともともと不安定な対人関係を持っている人がメールをするようになるのかはわからないということをご発言されたと思うんです。それが、メール依存の構造と潜在的危険というスライドになりますと、メールによって子どもの問題性が加速されているという内容で、これはメールが原因だという指摘になっていると思うんです。すなわち、相関関係の議論から因果関係の議論にそのまま進まれているわけで、この間に根拠があるはずではないかと思うんですが、そのあたりの根拠はいかがでしょうか。

【魚住氏】この構造は、もともとボーダーライン・パーソナリティーという人の構造と一致するところがあるんです。そういった根本に愛情飢餓を抱えていて、心の中に空虚さを抱えている。それはどこから来るかという、先ほどお話ししましたように、親子関係でのきちんとした、安定した関係ができていなかった、認めてもらえてなかった、愛されてなかったという不遇感から来ているんですけども、そういった子が、思春期になりまして他者へ依存していく。しかし、根本的な関係は対人関係や親子関係が基盤ですから、そこができていないと、他者との関係がやっぱりうまくいかなくて、不安的になって、さらに愛情飢餓を強めて、理想化した関係を求めていくというような構造があるんです。もともとあります。

そういった子が薬物とか売春とかに走っていくということはあったんですけども、その傾向が、今の女の子たちにより顕著に見られるようになってきたなど。私は個別に日ごろ子どもたちと接する中で、メールというツールが、相手の思いをこういうふうに言ったらどう思うかなと考えながらやりとりしたり、あるいは今ちょっと待ってみようかなというような、これまで対人関係の中でとれていた距離というものをとれなくさせてしまっているということを感じます。それでそういったツールがスピードを速めてしまって、強化していつているのではないかなというところです。

(3) 柳沢治通氏・遊橋裕泰氏の説明・質疑

【柳沢氏】モバイル社会研究所の柳沢でございます。この10年ぐらい携帯電話がぐっと増え、文化・社会に影響を与えているという認識から社会科学の視点から影を縮少し光を伸ばすことを目的とした研究所を発足させていただきました。

子どもの問題は研究所でも重要視してまして、去年の7月には香山リカ先生や下田先生をお招きして、子どもとモバイルメディアというテーマでフォーラムを開かせていただきました。今年度も子どもの問題は継続して研究活動を展開したいと考えております。

今日は、主任研究員の遊橋の方から、お話をさせていただきます。

【遊橋氏】よろしくお願いいいたします。事務局の方から、有害情報と、それに対するキャリアの取り組み、それから将来に向けて考えるための素材を提示してもらえないかというお話をいただいています。委員の皆様は、年齢も比較的高めの方がいらっしゃるということで、具体的に有害情報はこういったものがあるのかお見せしながら話を進めていきたいと思っております。ですから、事前にお断りしておきますけれども、女性の方など、少し気分を害するような映像が出てきた場合には、少し横を向いていただいております。お話を聞いていただければと思います。

では先に、通信事業者の側から子どもの件がどう見えるのかというお話をさせていただきます。私ども、憲法と電気通信事業法に、「通信の秘密」と「役務提供義務」というものが書かれています。通信の秘密というのは何なのかというと、通信の当事者以外にはその内容は秘密にされますということ。それから、役務提供義務というのは、通信事業者は正当な理由なしに役務の提供を拒めないということです。

これは良い面も大きいのですが子どもの問題にかけていいますと、通信の秘密では、今、迷惑メール等がいっぱい飛び交っていますが、迷惑メールの中身を見て迷惑メールをはじめとといったようなことができなかつたり、役務提供義務では、明らかに有害サイトだとわかっているにもかかわらず、そこへのアクセスを制限することを、実際の利用者の申請なしには設定ができないといったものになります。こういったことが、実はかなりインターネットの負の部分への対策を困難にしているところがあります。

ただ、今日ここで話しさせていただくのも、そういった事情もあるのですが、子どもの件というのは、そのようなことを言っていられない可及的速やかに対処が必要なものであるといった認識を持っております。IT先進国等と言われながら、子どもたちにとって良くない情報環境になっていることもありまして、ぜひ今日は赤裸々な中身の話をすることで本質的な対策を考えていただければと思っています。

私ども通信会社から見てどのようにインターネットの今の状況が見えるのかというと、昔は情報の非対称性というのがあって、マスメディア等が情報を配信しますと、その途中では、地方だと情報が遅れたり、それを受け入れる人がいないので情報がうまく伝わらなかったりといったようなことがあったんですが、今は、情報の中心地から同心円状に配信されるのではなく情報の発信者が必ずしもこういうマスメディアだけではなくて、一般の人たちが情報を発信できるようになりました。

特に、まだマスメディアベースのメディアリテラシーも十分ではない小学生、中学生、高校生も、携帯電話を手に入れたことで、少しあやういままに個人が情報発信の主となって、いろんな人とつながっていくようになってきています。出会い系サイト等もこういった個人の発信の仕組みに介在するような形で働いています。

私、よくこのことを道路と自動車の関係でお話するんですが、昔は、職業運転手の人が黒い車で情報網を走っていたんですけども、今は、多くの人がカローラか何か安い車を手に入れて一般道を走っていると。当時、一般にマイカーが売られるようになったときに、マイカーでパチンコ屋に行くなんてけしからんという議論があったそうなんですが、今はその状態に近いような形で、個人が情報発信できるまさにテレビ局の小さいもののようなものを持ち歩いて行動しているといったようなことだと思います。

下田先生との共同研究から説明すると、今まではメディア側から子どもたちに何らかの情報が伝わるまでに、通信事業者も介していますし、家庭、学校、地域といったようなものが介在していたんですけども、今は、携帯電話を持つと、メディア環境と子どもたちの間にダイレクトパスが発生して、学校、家庭、地域といったようなものは介在しないでコミュニケーションが行われるようになります。ですから、ここが重要なのですが対策のポイントというのも、私どもが考えているのは、メディア側の環境をどうにかするのか、それから子どもたちのところで対応力を上げるのか、それから意図的にダイレクト・コミュニケーションの間にチャイルドケアができるような体制をつくり出そうとするのかといったような3点に絞られるんじゃないかと考えております。

では、具体的に有害情報の話に行きたいと思います。まずは、メールのお話をしたいと思います。

迷惑メール、かなり話題になっていますが、実はドコモのデータ上は、迷惑メールはかなり落ち着いてきているといったような状態にあります。迷惑メールか普通のメールかを、先ほど説明した通信の秘密があるので、事業者側で切り分けることはできないんですが、

迷惑メールが来た時に、ドコモ側へ通知してくださいというふうな形で窓口を設けております。そこに来る通知をこのようにグラフにしております。そうすると、ほぼ2005年に入ってから減少の傾向にありまして、後ほど私たちも携帯電話の回線を用意して実験してみたんですが、迷惑メールは予想よりはかなり少ない数しか飛んでこない状況でした。

迷惑メールというのは、送信料と送信件数、それにそういう設備等を用意する名簿購入費用も含めた合計コストと迷惑メールを発信して得られる収入との関係で一番効率のいい、利益が出る手段が使われます。メールは、1通当たり3円程度、SMSというショートメッセージは5円程度、はがきが50円、封筒が80円ということで送信料の桁が1つ違いますので、eメール、それからショートメッセージといったようなものを使いたいというのが有害情報を提供する側としてはあると思います。ただ、今は、こういったところに関してはかなり対策をしてきていまして、実際に名簿が漏れていない限りは、それほど多くの迷惑メールは来ないだろうというところまで来たという見方をしています。

実際に、迷惑メールを受信してみました。比較的短い、しかも名前をもじったようなアドレスをとりました。こういったメールアドレスが迷惑メールを受けやすいのですが、4日間2つのアドレスを用意して受けた合計の迷惑メール数は17通、うち5通は携帯電話には意味がないパソコンをねらったウイルスの添付メールでしたという結果となっています。

ちょっとサンプルが少な過ぎたので、割合にどこまで意味があるのかということなんですが、男性向けに打っているのが大体半分弱ぐらい、47%、女性向けに打たれているのが24%というような形で、両方とも女性の名前をつけたんですけども、実際は女性、男性の区別なく送られているといったことがわかります。

具体的に送られてきた内容なんですけれども、出会い系サイトの広告が38%。それから、直アド返信待ちと書いてあるのですが、メールの返信をしてくださいといったことで案内が来たのが17%。あとは2件ずつになるのですが、フィッシング詐欺、それからサイトへの誘導、それから企業広告、パソコンのウイルスといった結果になっています。

出会い系サイトなのですが、最近の出会い系サイトの案内のメールというのは巧妙で、出会い系サイト自体から送ってくるというのではなくて、こういう「掲示板を見たんですけども、アドレスは合っていますよね？ 私は中島といいます」という形で、友達を装って、私が紹介していますといった形で送られてきたりします。

次ですけれども、では、メールの返信を直接求めるサイトというのはどういったものな

のかというと、「メールアドレスが変更されました。設定を変えてください」とか、「変更されたのでもう一度メールを送ってください」というようなこと。それから友達を装って、いかにもミスであて先を間違えて送ってしまったといったメールが届いたりします。受け取った側にまちがいを教えてあげなくては、と思わせるわけです。

それからサイトの勧誘のメールなんですけれども、このサンプルは写真にプリクラのようなデコレーションを施せますという話ですとか、サイトの方から曲がダウンロードできますといったことが案内で来るんですけれども、ここでオムロンエンターテイメントという名前が出てきますが、実はこれは子どもたちがよく知っている会社で、プリクラの会社なんです。でも、そこを装って、実はオムロンの会社はつくっていないんですけれども、オムロンの会社のサイトだということで作られているものが出てきます。これは純粋にサイトの案内ではなくて、会員登録をすると自分のアドレス等がとられてしまうというフィッシングに近いものです。

次に、携帯電話向けのアダルトサイトを紹介したいと思います。左はアダルトサイトのトップページでして、その次、この中で売られているビデオの紹介が出てきます。さらに動画が再生できます。アダルトサイトも、最初は大体ライトな感じで、この女性も服などは脱いでいないのですが、だんだんえげつない形に変わっていきます。まだ見られていない方もいらっしゃると思いますので、どの程度見れるのかということ、簡単にデモンストラレーションしたいと思います。

これが先ほど紹介したアダルトサイトのトップページです。かなり画像の方はきれいに出来ます。この中に入っていくと、実際に商品の購入もできるのですが、無料の動画などが用意されています。検索エンジンに登録されているのでこれは簡単に、実は子どもたちもアクセスできる一般のURLで、ここまで見れます。最近の携帯電話であればこういった動画が表示されます。これは驚きなんですけれども、おしりに吹き矢が当たってささっている内容となっています。

このように、普通のアダルトサイトといった顔をしているんですけれども、先ほどのようなえげつないものが出てきます。それからもう少しこのえげつなさが発展したものかと思うのですが、殺人サイトですとか暴力サイトといったものがあります。左側は殺人犯の人生と手口を紹介したものです。そしてこれは実際に人の首が切られるシーンの動画をダウンロードできるようになっています。

実際に首が切られるシーンは、皆さんが見ても、おそらく非常に嫌な思いをされるだけ

だと思いますので飛ばします。それ以外にもドラッグ、覚醒剤の作り方、爆弾の作り方、それから裏金融と書いてあるところは架空口座の作り方、それから警察に捕まっても駐車違反のお金を払わなくてもいい方法とか、そういったものも、ここで紹介したようなサイトとして出てきます。さらにもう少し精神的な所に行きますと、自殺志願者の掲示板、これは実際に私が内容を確認しましたら、知人の自殺をかなり美化していたり、それから自分は自殺したいけれども、仲間はいませんかという形で、仲間を募る投稿もあります。その外に家出掲示板というものがあって、家出の未成年者を宿泊させてあげますといったアピールすることを掲示板の方にいっぱい書き込んでありました。

最近の有害情報の1つの傾向として、定量的にはわからないんですけども、単なるアダルトサイトといったところではなくて、このような自殺だとか暴力だとか、そういう、かなり若年齢の子どもたちが見るとかなりショックを受けそうな、非常にショッキングなものが公開されています。また、そういったものを受けて、これは子どもたちがよく好んで見ている絶望の世界という日記風小説がありまして、こちらの方は、いじめを受けていた子どもが主人公の設定になっているんですけども、非常に暗い内容となっています。そんなところが、精神的なダメージを与えるのが最近の有害情報と言えるんじゃないかと思えます。

それから先ほど、小説をサイトの方に公開しているという話もありましたが、特別な能力なしに、携帯電話だけを持っていれば、外向けにホームページを公開したり、仲間を募ったりできる機能を提供しているサイトがあります。自警団のようなものをつくりまして、サイト内で健全運用に努めていच्छる善意のサイトもありますが、技術的には個人でホームページを使って発信するということは、今は簡単にできる状態です。

次に、出会い系サイトを実際に使ってみましたということで、代表的な出会い系サイトが一番左側のサンプル画面です。実際に書き込んでみるとどうなるかということ、こういう写真つきのおさそいメールが届いたりします。返事は何も考えられていないコピーされた内容を無差別に送っています。

そういったものに返事を返したらどうなるだろうかということなのですが、返事を返してみたところ、調子に乗ってきまして、次に来たアピールのメールが、男性器が大写しにされたものが送られてきました。こういうメールを、こちらが17歳と名乗っているにもかかわらず送ってくるということです。実際に、掲示板には18歳だといって書くんですけども、1回目のメールのやりとりのときに17歳ということで、その後返事が戻っ

てくるかどうかを見ると、実は全通戻ってきまして、17歳か18歳かというところでガードが全然かかっていないということもわかりました。

こういう出会い系サイト以外にも、もう1つ、出会い系の顔をしていないネットゲームでのやりとりといったものも非常に近い使われ方がしています。携帯型ゲーム機も、そういう対象になっているととらえていくべきだと考えています。

これは1年前のデータなんですけれども、小学生、中学生、高校生、実際にどれだけ持っていますかといったことを調べてみたところ、大体、中学生が持ち始めの時期、高校生はほとんど持っている状態です。持つ理由は友達が使っているとか、進級祝いだとかということで、中高生になると、若干親の意図とは違う形で持ち始めの理由が上がってきます。親御さんの方は、友達とメールでばんばん連絡をしてほしいから渡しているのではなくて、やはり家族の連絡手段ととらえています。どういった人とメールのやりとりをしますかということで、親の認識との乖離があるのは、学校外の友人、それから顔も見たことのないメールだけの友達、メル友といった者とのやりとりが保護者の認識より高い形でなされています。

実際にメル友の年齢はほぼ同年齢のようで実際にメル友に会ったことがありますかと、これはメールで友達になった後で会ったことがありますかというところなんですけれども、中学生全体だと38%。高校生でも4割ぐらいが会ってます。保護者は、ほとんど会ったことがないと思っているので、実際の状態とはかなり開きがあるのが実情と考えて下さい。

もう1つ、携帯電話の利用時間というところも、親御さんの認識とは違うお子さん方の利用の実態があります。特に深夜に使っていますといったところは、もうこれは親御さんが寝てしまっている、もしくは子どもがベッドの中等でやっているのだと思うんですけれども、数値に大分乖離があります。

こういった状況を受けまして、私どもの方は有害サイト等に、最初からアクセスできなくする子ども向けのインターネットサービス「キッズメニュー」をやっています。初めから大人向けのiモードと違ってまして、「みんなにオススメ」とか、「まなぶ・しらべる」、「たのしむ」とか、「ケータイ安全教室」とか、そういった項目が並んでいます。実際にクリックしてみると、このように子ども向けに、かなりアレンジされたものになっています。これは一応子ども向けで、こういったコンテンツ提供の会社さんにもご協力をいただいて、無料で提供して、かなりご利用いただいています。

このようなものと、もう1つフィルタリングサービスがあります。私どもでは「キッズi

モードプラス」と呼んでいるんですけども、これがいわゆるインターネットのサイトを、ブラックリストとホワイトリストでフィルタリングするサービスになります。内容の方でもフィルタリングしているのですが、実はもう1つ、先ほど深夜の時間帯が親御さんの認識外ですというお話をしたかと思うのですが、深夜の時間帯に使わせないといった設定も、このフィルタリングのサービスでは行っています。これはドコモだけのノウハウで、そうした方がいいだろうということで入れ込んだものなんですけれども、深夜、認識していないところで使われているといったところも、あまりよくない利用になっているだろうということで、夜10時から朝の6時までではアクセスできないようにするというのをやっています。

それから、なぜ、お子さんにいろいろサポートできないのですかというところで、親よりも子どもの方が知っているからできないといった声が上がっています。実際に、親御さんがどこまでいろいろな設定ができますかと聞いたところ、半分以上できると答えたのは、番号の通知・非通知の設定とパスワードのロックということがわかりました。では、そのレベルまで落としていかないと、親御さんにいろいろ対応してもらうことは難しいだろうということでつくったのがキッズケータイというものです。これは親御さんとお子さんで、パスワード等を変えまして、通常は1つしかついていないのなんですけれども、親御さんがパスワード設定をすると、お子さんは自由にその環境を変えられないといったものになっています。1つ特徴的なのは、ストラップを引くと防犯ベルが作動します。この防犯ベルがなると、あらかじめ登録してあった3カ所に緊急通報が行くということと、この後で何かあったときに、電源を切られても、15分おきにこの携帯電話の位置をセンター側に通知するといった機能を持っています。

KDDIさんも、#(シャープボタン)の長押しで、同じく防犯ブザーになるものですか、最初から3カ所ぐらいしかかけられませんといった子ども向けの携帯電話を出されています。

また、auさんでもボーダフォンさんでもフィルタリングのサービスというのはやっています。先ほど言った時間で制限するというものは、今のところドコモだけなんですけれども、auさんもボーダフォンさんも、有害な情報はフィルタリングをかけるというものを無料で提供しています。さらに、先ほど、ドコモのこの端末とauさんの端末のみ、緊急通報が入ったときにセコムさんが駆けつけるといったサービスも提供されています。

今のところ、こういったものが通信キャリアの方でできることなのです。

もう1ついただいたお題で、将来に向けてというところなのですが、最近、携帯電話がさまざまな犯罪等にかかわってしまっているといったことがあって、携帯電話を持つと、子どもたちが非常に悪い行動をとってしまうようになるんじゃないかという話があります。携帯電話が原因で結果として行動に影響するか調べました。

これは相関係数というのですが、相関係数というのは1に近ければ、ほぼ関係があるだろうと。ゼロに近ければ関係がないといった形になるのですが、全体の傾向としては、携帯電話を持ったから、もしくは利用時間が長いから、メールの頻度が多いからということで、直接子どもの行動に特徴が出るというわけではないと説明できます。ただ、逆に携帯電話を使う子どもがどういう行動特性を持っているのかを見てみると、持って半年以内の子どもたちで情報収集能力とか、関係構築力というところが低い数字で出ています。原因と結果の話でいうと、携帯電話は原因になっていないという話にはなるのですが、一方で、持って半年以内の子どもたちがどういう傾向にあるのかといったところでは非常に有意義ではないかと考えておまして、持って半年以内の子どもたちには、おそらく情報収集能力とか関係構築といったところで、ほかの子どもたちに比べて、若干低い側に出ていると、おそらく携帯電話の画面を注視して、そこだけを信じてしまう傾向とか、その関係に偏ってってしまうという傾向が、おそらく最初の半年以内は出やすいところがあるのではなかろうかと。

一方で、長く使っていくと、挑戦意欲ですとか主体性といったものが、比較的低いところに出てきます。こういったところで、おそらく、ここら辺は想像なのですが、少しネットの世界等にあきらめが出てくる、大人たちの嫌な部分が認識されてくるといった部分があるのではないかと見受けられます。これはお手元の資料には、高校生でとったものがあって、実は高校生では軒並み、携帯電話を持っている方が高い値に出ているのですが、今回、中学生で計算をやり直してみたところ、中学生だとこういった傾向が見られたということです。全体だとこのような感じになります。

まとめに代えて、子どもの関係の法律等を見させていただいたのですが、基本的に日本というのは、比較的どう育てほしいといったところがあまりないままに、健全育成に資する環境にしますよといった、対策の話ばかり書かれている条文になっています。一方で、ドイツですとか韓国は、青少年に対してどう育てほしい、そのためにどういう対応をとっていくのだという法律の条文になっていまして、今回も原因と結果といった話では、携帯電話自体が悪ではないのですが、携帯電話やインターネットを悪用した有害な環境とい

ったものは、おそらく、かなり今、子どもたちにどう育てほしいという議論がない中でつくられてしまっているといったものがあるんじゃないかと思っています。できればそういったところの価値観を前面に出すような形で、総合的な対策をとることができないだろうかと思っている次第です。

【座長】どうもありがとうございました。短くご質問を受けて、次の発表に進みたいと思います。

【C委員】安全・安心キッズケータイをお出しになって、アクセス制限はそこでできていると。ブザーがついていると。おっしゃったわけですが実際その安全ケータイを欲しいと買って買いに行きますと、これは量販店で調べているんですが、制限のない普通にインターネット利用が可能なものを買わされる。いってみればブザーがついているだけの、デザインは子ども向けのをまず売られるという実態がありまして、どこかで抜けているのではないかと私どもは思っていますが、そういう現状はございますか。

【遊橋氏】販売店は、必ず伝える話にはなっていますが、実際にC委員が行かれた店では対応が良くなかったかもしれません。

ただ、その付近に関しては今かなり認識してまして、きちんとアナウンスするようにしています。ただ、最初からフィルタリングをデフォルト設定等にできないのは、通信の秘密や競合の各社さんとの関係があります。

【C委員】背景に業界の激しい競争があることは私も認識しています。多分店によって相当差があるんでしょう。

(4) 下田委員の説明・質疑

【下田氏】私はメディアの研究者という立場から、子育て・教育上派生した問題を整理していくうちに、特にインターネットといっても、携帯インターネットと言われる携帯電話からのインターネット利用のメディア特性というものに注目しています。今日はその整理をさせていただいて、今後の議論、対策等の参考にさせていただければと思ってお話するわけです。

まず、私は、皆さんもご承知だと思いますけれども、インターネットをこういうふうにとらえておりまして、皆様の議論の中でとらえ方についてもご意見を伺いたいわけですが、個人の情報・コミュニケーション能力を向上させて目的実現の行動を最適化、効率化するパーソナルメディアであると認識しています。

ご承知のように、インターネットのメディアとしての変革力と申しますが、社会に及ぼす力というのは、個人の情報行動を大きく変化させ、それがひいては組織、社会の行動変化に結びついていく。その変革の力が大きいということです。従来のテレビに比べていろんな局面で新しい作用を及ぼしているし、また影響力も大きいと認識しております。

特に携帯電話からのインターネット利用に関して、携帯インターネットというメディアのパワー、特性ですが、それをもう少しわかりやすくといいますが簡潔に説明できるものとして、私の著書の『ケータイ・リテラシー』という本の中から、特に47ページのところなのですが、一番最後から5行目以下を少し読ませていただきます。

携帯電話の進化ということを行っているわけですが、つまり「これまで音声、言葉によるコミュニケーションのための道具としての携帯電話は、欲しいものを言い、それを手に入れる手段に変身する。話すことができる道具から、欲望をかなえる手段に向かって発達しつつある」ということです。今後ともケータイの進化はこの方向で進められていくだろうと思っております。いつでもどこからでも、目的実現行動を効率化する。情報・コミュニケーションというだけではなくて行動する。あるいは行動を促し支援するツールという方向に向かって進化していると私はとらえております。

そういうことを前提に、インターネットのメディアとしてのサービスについて大まかに括りますと、バーチャルなレベルでのネット上、ネット社会でのメリットと、それからリアルな社会、普通の生活上、物や人が動いていく従来の物理的空間社会での影響というもの2つに分けて考えなければいけないだろう。

よく、バーチャルだからということで、それは現実ではないということをおっしゃるけれども、そうではなくて、ここの部分のバーチャル空間での情報・コミュニケーション支援サービスとしてのインターネット網で起きるコミュニケーション、あるいは情報受発信行動が実際の現実の社会の物や人の動きにかかわっていく。そういう点では、バーチャルリアリティの技術のひとつとしてのテレプレゼンスというような技術の特徴がございませぬけれども、それを携帯インターネットは提供している印象を強く受けております。そして、このリアル社会での行動変化がさらにバーチャル社会でのインターネットの情報世界にも影響を及ぼしていくという、この相関関係の新しい社会モデルに私どもは注目しているわけです。

それから、マスメディアと違ってこのインターネットは自己責任を迫るメディアであると私は主張しております。情報選択も受信者の責任でございまして、情報発信ももちろん

責任が伴います。匿名性等で行われるコミュニケーションも実は本質的には自己責任を迫られているものである。それから目的を実現するためにいろいろとネット上で計画をし、討議をし、打ち合わせをし、実際に何か行動をする場合にもシミュレーションとか、ナビゲーションという機能がネットのメディアに入っておりますので、こういう全体的な目的実現行動のための利用についても実は自己責任を問われるわけです。

ネット詐欺に遭ったとってわめいたりしますけれども、ネット上のこのような行動、だれかに会ったり物を買ったりというときも、サービス機能がついてやりやすいわけですが、それはもちろん自己責任を伴うということでございます。言ってみれば、インターネットというのは、集団責任が好きな日本の社会に、個人の自己責任を迫る一種の黒船ではないかと私は以前より主張しているわけです。

さらに、今後の議論の中で、もちろん皆さんご承知だと思いますが、改めて言わなければいけないのは、パソコンからのインターネット利用と携帯電話からのインターネット利用の同じところ、違い、相違、それについてもやはり念頭に置きながら議論をしていかなければいけないと思います。

従来は携帯電話からのネット利用はインターネットの情報環境を一部しか利用できないものになっていたわけですが、完全に基本的には同じものになってきた。ただ、問題は、こちらの携帯を使いますと行動性、目的実現行動と私は言っていますけれども、それを支援する力がこちらの画面のケータイの方が強いわけです。携帯インターネットの方が強いわけです。そんなような違いがあると私どもは認識しております。

さて、ここから本題ですが、このようなテレビ以上に大きな影響を及ぼそうとしている、人間関係、社会の仕組みに影響を及ぼそうとしている便利な、パワフルなメディアが、子育て・教育上責任のある教員や保護者の立場視点から見ると、むしろデメリットが浮かんでくるということです。問題のある特性が浮かんでくるということです。もともとインターネット利用に関して日本の社会は大人と子どもを切り分けられない議論がずっと進んできたのではないかというのが私の主観です。大人には便利だけど、子どもにはどうかという議論をぜひ今後ともしなければいけないと私は主張しております。

幾つかの理由を上げてご説明をしたいと思います。まず私はバイパス回路と呼んでおりますが、これは親や、それから子どもの幸せを考えられる、子どものことを考えられて初めて大人と言えるわけですが、そういう教員とか保護者にとって頭越しにいろいろと情報が子どもに入ってしまう。あるいは親や教員のわからないところで子どもの行動が

促されてしまう。行動を促進してしまう。そういうメディア特性を持っているということ
を主張しているわけです。

従来であれば、子どもに見せたくない情報をマスメディア時代まではここでブロックで
きたんですが、現実にはこれができない、そういうバイパス回路がつくられていると主張
しているわけです。そして、子どもはダイレクトに、主体的に、あるいは自分が意図的で
なくてもシャワーのようにいろんな情報が入ってくる。特に携帯であれば小さな画面に。
そして、それに対して、ダイレクトに入ってきますから、大人はどんな情報が子どもに入
っているかわからない。特に携帯は画面が小さい、それから、移動性ということがありま
すのでこの辺の把握が非常にしづらい、そういう道具であるわけです。子育て・教育上は
注意が必要なはずです。

それから、この情報を見て、そして相手方とつながってしまう。従来は変な情報を発信
する、そういう危険な大人は近づけないようないろんな社会的な仕組みがあったわけですが、
それが場合によっては無効化されてしまう。非行犯罪グループも簡単につながってしま
う。子どもはそれに興味を持てばコンタクトといえますけれども、関係性を持つことが
できる。そういう、私はバイパス回路、迂回の回路と言っておりますけれども、子育て・
教育上注意されるべき情報メディア環境が世界のどこよりも日本で早く生まれてしまった
ということを私は主張しているわけでございます。

それから、もともと日本でインターネット利用が携帯電話に先駆けて、パソコンからの
インターネット利用が始まったわけですが、私どもの調査によりますと、特にご父兄方、
あるいはIT担当の先生方もこのホワイト、グレー、ブラックゾーンというインターネッ
トの情報メディアの構造についてご認識がなかったと私どもは判断しております。

特にグレーゾーンに関しては、非常に判断が難しゅうございます。私どもの調査では、
IT担当の教師の方々もこのグレーゾーンの実態がなかなかわからない。一見、フィルタ
リングが効くようなものもありますけれども、ここは非常に難しいわけです。いいか悪い
か判断が難しいものがたくさんございます。

それから、場合によってはホワイトと言われる、例えば「写真美術館」とキーワードで
入れますと、写真美術館に関する情報が出てきます。その中にはアダルトの写真美術館に
引っ張り込まれてしまうというような、ウェブトラップと私ども呼んでおりますが、わな
が仕掛けられている。それはグレーとかブラックに行くほど多くなっていくというのが私
どもの知見でございます。

このインターネットの情報環境にはわなやトラップが非常に多いという、もしくはもう1つ、子どもは落とし穴、ピットホールと呼んでおりますけれども、子ども自身が知らないうちに自分で自分を落とす穴をつくってしまうと。わかりやすくアナロジーにいたしますと、そういう落とし穴的な環境がネットの中でインターネット時代にあらわれてきているということについて、十分な認識が社会的にないのではないかとこのことを憂慮しているわけです。

佐世保の事件のときに私が最も主張しましたのは、あの子は、もし大人がちゃんと注意していれば、あのケースはピットホールといひまして、落とし穴に自分で入ってしまった。自分でつくった落とし穴に自分で入ったと私は表現しているわけですが、なぜそのところを我々が注意できなかったのかと私は言っているわけです。

このインターネットのブロードバンド化、あるいはインターネット利用の簡易化、あるいは料金の低額化等々によって、子どもたちの目に映ってくるインターネットというメディアは、遊び、いやしの要素が非常に大きくなっている。その中でストレスを解消するために遊んだりいやしたりして、そして元気になってまた戻ってくる子どももいれば、この中に先ほど申し上げましたウェブトラップや落とし穴というものをちゃんと教えられないまま落ちてしまって、そして自分も被害者になるばかりだけではなくて加害者になってしまうと。この情報環境について我々は十分認識しなければならないと主張しているわけでございます。

基本的に私が最も主張しておりますのは、インターネット以前のマスメディア、テレビ、書籍、ビデオだけの時代と、パーソナルメディアの時代は、大きく違うのだと。子育て・教育上、この構造的変化について我々はイメージしなければいけないと主張しているわけでございます。

従来、マスメディアの時代は、私は人間フィルタリングと申しておりますけれども、コンピューターのソフトウェアのフィルタリングというのは、完全なようで穴がございます。人間フィルタリングとコンピューターフィルタリングを組み合わせる子どもたちを守り育てていかなければいけないというのが私の主張であるわけです。

従来、人間フィルタリングというそういう言い方をして説明をしておりますけれども、これが地域社会、家庭の中で生きておりますと、いかにマスメディア時代でも有害情報発信業者はいたんですが、それが子どもに直接届くことはございませんでしたが、現在はダイレクトにその努力がきかなくなっている構造的に変化が起きているということについて、

私は注意を喚起しているわけです。直接届いてしまいます。届くだけではなくて子どもたちの世界のパーソナルメディアのネットワークの中で、子どもたち自身がその有害情報を広げてしまいます。子どもたちは発信者としてのプロデュースの喜びを知ってしまう。いいプロデュースをすればいいんですが、悪いプロデュースをしてしまったら、子どもはそれについてどうやって注意をするのかという問題が出てきているわけでございます。

基本的にネット上の遊び場について子どもは注意をしていかななくてはいけない。従来子どもの少年少女時代も、地域の大人や親はこういうところでは遊んではいけないと。いろんな意味で歓楽街だけではなくて、基本的に心理的にも物理的にも危険なところについては注意する。新しい遊び場として立ちあられ拡大していくインターネット環境の中でのネット上の遊び場に対する注意が必要だと私は主張しているわけでございます。

そして、特に出会い系サイトというサイトのサービスです。それについて社会的関心も高まっていますが、インターネットというのはすべてが出会いの機能を提供するメディアであるということも忘れてはいけないと主張しているわけでございます。

さまざまな出会いが、ゲーム、変身、プリクラ、掲示板遊びで使われて、子どもたちはその中で遊んでいるけれども、その遊びの実態は親や教師にはバイパス回路になっておりますので、なかなか実態が見えない。こういう構造をつくってしまうメディアであると私は主張しているわけでございます。

例えば、出会い系サイトは使ってはいけない。子ども、出会い系サイトを使っていますかというアンケートを数年前から行っていますが、子どもたちが出会い系サイトを使っていないというアンケートに答える割合は低下しております。ですが、実はそれはひょっとして落とし穴ではないのか、子どもの知らないところで全く違った行動をとっているのではないかというようなことを子どもは憂慮しております。

例えば、サブアドレスを取得して掲示板で実際に出会い系を実行してしまっているということについて、子どもの方から子どもの方へ情報が提供されたりする。子どもから情報を提供されている1つとして、出会い系サイトというものの利用価値は、そんなに単純なものではない、非常に奥が深いということも教えられました。この出会い系サイトを使いますと、例えば、この場合は少女ですけども、カラオケの相手を探すこともできますし、夜遊び過ぎて車で送ってくれる大人を探すこともできますし、単に売春だけではなくて、豪華な食事も宿泊までも簡単に得ることができるということを子どもたちは知っているわけです。

そういうことについて、ひょっとしたら大人は現実をちゃんと見ていないのではないかと私はおそれるわけでございます。基本的にはバイパス回路というものを形成するこのメディアの特徴とそれを使い込んでいく子どもたちを認識できないという現実。それについて憂慮しているわけでございます。

私はPTA等の会合で、保護者の皆さん、子どもを信じるのは当たり前ですが、信じるだけでは、インターネットというものはそんなに甘いメディアではございませんと言います。信じるだけではなくて、子どもに対して注意し、そして見守り、変な使い方をしていたら指導するというところまでやって初めて親の責任を果たせるのではないかということはずっと主張しております。

例えば、お金だけ払ってパソコン、携帯を与えて、そして子どもがその場で喜んでいて、あるいはおとなしくしている。私も学校でも大学でも子どもたちがシーンとして一生懸命授業を聞いているふりをしているけれども、最近静かになったねと言っていますけれども、実際のところは、私は先週、今年の1年生に、中・高校生時代に授業中どれだけ携帯を使っていたかと聞いてみましたら、結構高い割合で使っていましたと。そういうような状態になってしまうということについてぜひ保護者の方に、そういう道具を与えているということについて、ちゃんと認識をしてくださいと申し上げています。

例えば、子どもは好き勝手にこれを使っていると、いろんな状態、心理状態によってこんなにおもしろい情報があると知る。それが物とか人につながるような、例えば危険な物を買う、あるいは売春相手を探す等々という情報であればそれに対して簡単にオーダーや行動ができます。そして、自宅にCD、わいせつCD、本、何でも結構です。薬物、凶器、その他の物も発送されます。今流通機構が整っておりますから、宅急便で家へ入ってくる。家に入ってきて、しっかりとしたしつけがある家庭ですと、これを見られるといけないと子どもは思ったりします。家庭でお父さん、お母さんがしっかりしているからきっと開けるだろう。そういうことを予見する子どもは、コンビニでこれを受け取って決済することができます。携帯インターネットは、この決済能力をさらに強めてまいります。情報が行動につながるということでございます。

それから、私どもは英語でクロッシング・ザ・ボードと呼んでおりますけれども、有害環境を越境させてしまうという効果をこのメディアは発揮するということについて、子育て・教育上注意をしなければいけないと私どもは主張しているわけでございます。

どういうことかといいますと、従来のコミュニティ、都市は、非日常的な、あるいは歓

楽街のような子どもに近づけたくないような有害な情報や、情報だけではなくて物や金、人が集積しているようなところ、そこを線引きをしまして、そして日常的な教育に良い、子育てにいい生活空間というのを分けている。文教地区ですね。そうやって子どもを育ててきた。その常識が今度のパーソナルメディア革命というものの中でどこまで通用するんだろうか。そのことについて我々は注意しなければいけないという主張をしているわけがあります。

例えば、文教地区で1戸建ての念願の家を建てて、さあ子どもを育てようと。頭がよくなるということを聞いたのでパソコンを買い与えて、知見を広げるためにインターネットをさせたとします。子ども部屋で勝手にインターネットをして、子どもはいいことで、学習目的でインターネットを使うだろうと思ったとしたら、決してそんなことはないことを注意しなければいけません。

たまたまいろんな状況下で意図的、あるいは意図的ではないにせよ、グレーゾーン、あるいはブラックゾーンにアクセスをしてしまったといたします。そうするとその中で子どもはすぐ近くに自分が前からとても買えない、欲しくて買えないけれども、例えば殺傷能力のあるエアガンが売っているなんて店の情報を見つけたりしますと、買いに行くこともできますし、先ほどの宅配便を使いますと、簡単にそれをオーダーして売ってもらう。つまり届けてもらうことができるわけです。従来であれば知ることできないし、買うこともできなかったこのゾーンから物が移動して家に送られてくる、こういう構造になっているわけです。

物だけではございません。これは実際にそういう事件があったわけですがけれども、思春期で性の情報を非常に求めている男の子に対して、歓楽街のよからぬお姉さんが、自宅まで行ってあげると。近くの公園からケータイで下へおりていらっしやいということもできます。向こうがこちら側に入ってくる、あるいは呼び出されるという力を持っている、そういうメディアを子どもは子どもに手渡しているのではないかということについて、憂慮しなければいけない、心配しなければいけないんじゃないか。子どもを信じているというだけではとても子どもを守れない、育てられないのではないかと私は現状のメディア構造をみて心配をしているわけがございます。

モバイルインターネットは、特にパソコンからのインターネットと違いまして、子どものさまざまな欲求にこたえるメディアとして発展をしていくであろう。これまでも発展をしていますし、今後とも発展をしていこうと私は主張しております。

もともとモバイルインターネット、携帯インターネットの日本でのデビューの仕方そのものを見ますと、それは子どもの遊びのニーズにこたえるものとして新商品として売られ、ポケベル遊びをしていた高校生、女子高生等を中心として流行し、それが大人の世界に普及してきたという厳然たる事実がございます。

コンピューターというのは、設計思想とよく言われますけれども、実際にハードウェアだけの商品、製品とは違います。その中にソフトウェアが入ってまいります。ソフトウェアを入れることによって、そのメディアを開発する場合に思想というものが入ってまいります。コンピューターはそういう特殊な機械でございます。その設計思想からいいますと、もともとは教育目的としてこれが発売されたものではなかったということについて私は注目をしております。子どもの手に渡ったケータイは基本的には遊び、いやし、暇つぶし、ショッピングというものにこたえる設計思想を発展させるでしょう。

実際に暇つぶしをして情報だけではなくて出会おうというときにこれは非常に便利なナビゲーション機能を今後つけてまいりますから、こういうものを使って行動しやすくなる。例えば、全く会ったこともない、見たこともない人が、今あなたが会いたい人は半径50メートル以内のところまで近づいていますよということを教えるサービスが入ってきます。そういうことを我々は注意しなければいけないだろうと思っているわけです。言ってみれば、子どもたちの欲望実現のための効率的、あるいはその行動を最適化するメディアであるという特徴を持っている。

それから、モバイルインターネットの特徴なんですが、都市環境全体が1つの情報メディアであるわけですが、子どもはこれを持っていますと、町中にあるコンビニ、自動販売機、ポスターの中のバーコードとかいろんなものに、広告の中のものにもこれを反応させることができます。インターネット喫茶も当然、ケータイと連動して動いております。

私が特に今日申し上げたいのは、従来のマスメディアとも連動している、その子どもたちがつくる、子どもたち自らがつくる新しい情報メディア環境について、子どもはその実態を知らなければいけないのではないかと主張しているわけでございます。

私はマスメディアとパーソナルメディアとしての携帯インターネットの連動関係について、複合メディア環境と説明をしておりますけれども、この中で広がっているサブカルチャーに数年前から注目をしてまいりました。主にマスメディアの中のビデオと雑誌です。この雑誌もこの10年ほど傾向を見ていますと、例えば少女雑誌等は、非常に過激な、従

来の少女雑誌のイメージではとても考えられないような性的な情報のファッション誌、あるいはセクシュアルな情報の、アダルト雑誌と見紛うがごとき雑誌がたくさん出ています。このあたりが全くインターネット、携帯と無関係というわけではなくて、連動しているということについて私どもが注目しているわけです。

例えば、ここで、援助交際というものはだれもがやっているよというような情報が流れたとします。あるいはセックスに関する間違っただけの情報が流れたとします。そういう知識を得て、そしてそれがあたかもみんながやっているかのように受け取ってしまい、そして、モバイルメディアのドゥーイングといいますが、実行・実現、目的を実現する行動を促す、そういう機能を使って、そしてあれこれと、例えば援助交際のためのと言われるような出会い系サイトを使って、いや、それは売春だけではなくて、いろんなことに使えるということにお互いに子ども同士がネットワークをつくってやりとりをしていると知っています。そして、この中でお互いに情報交換をしている様子を見て、これを小説にして売り出す。

援交携帯小説と言われる『ディープ・ラブ』というのがその最初のヒット商品だと思いますけれども、これは大人が仕掛けた、子どものパーソナルメディアのネット活況の中に商売の種を見つけた大人が仕掛けたヒット商品です。これはマスメディアとして登場してきておりますけれども、そのもとの材料というのは、子どもたちのパーソナルメディアのネットワーキングの中から生まれた情報であるわけです。そして子どもたちは自分たちの体験が本になるということでプロデュースの喜びも得るわけです。

こういう中で、子どもたち自身がいろんな発信もするようになってくる。これは女の子が男性の性器を、これはプリクラ遊びですね、プリクラ掲示板の写真です。モバイルインターネット、携帯インターネットはカメラをつけました。もちろんご存じだと思いますけれども、このカメラはいろんなことに使えます。これを自らの顔も入れて投稿する。あるいは写メール掲示板で、これは中学生の子どもたちが集まっているBBS（掲示板）でございませうけれども、こんな写真を発信してみせると。

今、子どもたちの方がむしろわいせつになっているんじゃないかと私が疑うほどのことが簡単にできてしまって、これが当たり前だと思ってしまう子どもたちがふえているとしたら、これから先どうなるのかとちょっと恐ろしくなりますけれども、これは現実のことです。問題はパーソナルメディアだけにとどまらない。マスメディアと連動していることによって売ればよいというマスメディアの編集者が子どもたちの後追いをし、子ども

たちのサブカルチャーをむしろ応援してしまっている、そういう現状があるのではないか。

これは、今後対策というところでまた詳しく私の意見を申し上げたいと思いますけれども、子どもの携帯利用はいろいろな条件によってよい結果にもなりますし、悪い結果にもなるということですが、私が今見ている限りでいいますと、学校においても家庭においても、また地域社会においても決してよい結果を生んでいるのではない。この条件が、悪い方に働く条件が今多過ぎるのではないかということを懸念しております。

(5) 自由討議

【座長】どうもありがとうございました。携帯を軸に有害な情報ということ、いろいろなことがつながっておりますので、どこからの切り口でもよろしいんですけども、ご発言をご自由に。

【E委員】どなたか詳しい方に教えていただきたいことが2点あるんですけども、1つは、法に触れるようなよからぬサイトを運営している業者というのはあるんだろうと思いますけれども、そういうものというのはどの程度摘発が可能なのか、実際になさっているのかということが1つです。

もう1点、私、メールアドレスを公開しているせいか、毎日300通ぐらいの迷惑メールが来るんですけども、最近目立って多いのは、男性に逆援助交際なるものを誘ってくるものでございまして、これは、これ自体が事件として立件されたという話はあまり聞かないんですが、つまり、男性を性的対象としたようないわゆる逆援助交際というものはメール上だけの話なのか、実態が何かあるのか、ご存じの方がおられたら教えていただきたいんですが。

【座長】これは先ほどおっしゃったお二方に対する質問というよりは、警察庁のどなたかお答えいただければと思います。

【事務局】今、違法なサイトについての取り締まりということの関係でございますけども、違法なサイト、まさにいろいろな情報を掲載しているだけ、あるいは流出させているだけで違法というような、わいせつとか、あるいは薬物の流通、こういったものについては、私どもとしても、今、ちょっと正確な件数は直ちにはございませんけれども、毎年、検挙をしているという実態はございます。

また、これに準ずるものといまして、例えば、銃器の取引といったものにつきましても、私ども、関連の犯罪と合わせていろいろな取り締まりを推進しているという状況で

ございます。これはもちろん犯罪本体でございますけれども、これらに関連しましたサイトにつきましても、もちろんそれ自体が違法であれば、私ども捜査の過程で、検挙の過程で結果的にこのサイトをつぶすということがあるわけですけれども、直ちに違法と言えないようなものにつきましては、プロバイダーの方に削除の要請をするといったようなことを行っているところでございます。また、6月1日からは、こういったものにつきまして、広くいろいろな方々から情報もいただきまして、これについて私どもの方に、違法なものであれば情報をお寄せいただき、また、それぞれのプロバイダーの方に削除の要請や、あるいは約款に基づいた削除なり、あるいは実際のサイトを運営されている方への削除の要請といったような措置をとっていただくためのホットラインセンターといったようなものも活動を始めていくことになっております。

【F委員】今の説明ちょっと補足いたしたいと思います。E委員は、これだけとんでもない情報について、警察はわかっているちゃんと検挙しないのかというご指摘ではなからうかと思えます。それは私も本当にそう思っています、サイバーパトロールといって、警察もできるだけそうした今のサイバーの状況を監視しているわけですけれども、1つの問題は、多過ぎてすべてには手をつけられないという問題があります。また次回にしようと思えますが、たしかこういう違法なサイトに関連して、毎年千数百件の検挙があろうかと思えますけれども、それも私どもが発見したものの一部であります。手が回らないという側面が1つあります。

それから、匿名性の世界でなかなか被疑者を特定できないという問題もございます。じゃあ、そんな違法なサイトをほうっておいていいのかという問題が次に起こるんですけども、それについては、今、できる限りプロバイダーの方のご協力を得て、削除をするという努力を現在もしておりますが、これも必ずしも十分ではありませんので、今申し上げたように、6月1日から本格的にホットラインを設置するというので、できるだけ多くの国民の方々に、これ、おかしいじゃないかという情報をそのホットラインに集めてもらって、違法なものを警察に連絡してもらおう。そして、警察で捜査できるものは早く捜査をする。あきらめるものは早くあきらめて消してしまうという作業をしていこうということで、今、その取り締まりの強化と、どうやって減らしていくのかという取り組みについて、もう一歩、努力をしてみよう。まだその余地があると私ども考えていて、その点はその点で、もう一つ努力をしていこうと思っています。

【E委員】逆援助という問題は、ドコモの方、もしかしたらそういうメールがあるという

ことは認識されているのかなと思うんですけども、これは単なる詐欺なのか、あるいは未成年男子がいわゆる援助交際で被害に遭っているというケースがあるのか、そのあたりについてご存じの点がございませうか。

【事務局】逆援助交際のメールで、美人局といった詐欺事件は、私自身はちょっと存じないんですけども、おおむね特定のサイトに誘導するためのものが多いのではないかと考えています。

【G委員】今のこととちょっと関連してのことなんですけれども、実は、私の生徒が携帯電話の中に、以前、イラクで首を落とされた香田証生さんの殺害画像がダウンロードされていたんです。それが非常に問題だと思ひまして、「それをどこからとってきたのか」と言ったら、友達からもらった、友達からもらったというのを仲間内で突き詰めていったら、実は、そのある子がダウンロードしたのは2チャンネルだったんです。2チャンネルの中にそれが添付されていたのを落として、それをパソコンから携帯にという形で回ったということまでは突き止めたんですけども、例えば、摘発で、もちろん2チャンネルという掲示板を運営している人間を取り締まることはできないのかと。張っている人間を取り締まる。でも、公然とそういうことが平気で行われているああいうサイトに対して、何らかの手を加えることは可能なのか、不可能なのかということをおちょっと教えていただきたいなと思ひます。

【F委員】それ自体は何の罪も構成しませんので、警察としては何とも言いようがないということだと思ひます。青少年健全育成条例、名前はいろいろありますけど、各県が設けておひまして、それの中に、わいせつ以外に、暴力的な画像というものについて、青少年に有害なものだということで規制をしておひしている条例がありますが、それに当たりますかね。

【座長】そうですね。それから、あの2チャンネルは、刑法犯に触れるわけではないですけども、非常に名誉毀損性の高いものとか、非常に重要なものが。タリウムをやった子どものお名前を出してみたり。法的対応を全くしてないわけじゃないです。人権擁護局が抗議をしたり何かしても、非常に無視するといひますか、だから、さっきのE委員のご質問にもある意味つながるんですが、ネットの世界で、やっぱり国民の意識の中には、明らかにもう一歩取り締まってもいいんじゃないか。しかし、法律の壁があつて踏み込めない。それは先ほどNTTドコモの方がおっしゃつたような、通信の秘密、憲法上の利益とのバランス、表現の自由。それはものすごく大事だと思ひますけども、さっきNTTドコモの方が問題提起されておられたように、あそこでは、子どもの問題はそんな悠長なこ

と言っているんじゃないかという問題提起であったわけですが、子どもの問題でなくても、大人の名誉毀損でも、やっぱり考え直さなきゃいけない側面はあり得るけれども、ただ、片一方で、やっぱり非常に重要な利益として表現の自由というのはございませぬ。そこをどう扱っていくかということで、これからやっぱり私は動いていくと思っているんですけどね。あまりにも一歩踏み込めないでいる歯がゆさがいろいろなところでふつつつ沸いてきているという感じで、今回の議論すべてがそこにつながっている面があると思うんです。またその問題は全部つながってきますので、ほかにどなたかご発言があれば。

【F委員】ご意見をお伺いしたいんですけども、今、確かに携帯電話の問題点といったものが幾つも指摘をされているわけですが、今の子どもたちのすべてがこの害悪をこうむっているわけではないだろうと思うんです。こういう問題、そういう同じ状況の中に置かれていても、ちゃんと健全に育てている子どもたちも多数いると僕は思っているんですけど、そういう意味で、こういう今の携帯電話の状況というのが、どの程度の子どもたちに影響を与えているのかという点について、何か考えはないでしょうか。

【C委員】じゃあ、私のほうから。私は、携帯を使った非行犯罪ということより、今、もっと注目しているのは、日常生活における問題です。普通の子がこのメディアを使って、よくなっているのか、悪くなったのかということを生の中で洗い出してみることが必要だと思っております。まだ結論は出ていませんが、ひとつ、私どもの大学で、毎年、今年で3年目ですが、これは教師である私自身の問題でもあるから調べているんですけども、中学、高校時代に携帯の持ち込みが校則違反であるようなケースに限ってですが、中学なんていうのは校則として持ち込んじやいけないというところがほとんどだと思いますけども、そういう中で、それを聞いた上で、そういう校則を破ったことがあるかどうか。それから、特に授業中、これ、親指ブラインドタッチでできるものですから、携帯電話を声で使うとわかりますけれども、メールだけやりとりしているのはわかりません。バイパスになっているわけですから、それについてやったことのある人はちゃんと申告してくださいということをやっているんですけど、じりじりと上がっています。うちの大学は比較的勉強しないと入れない種類の大学なので、そのことを非常に私は今心配しているのと、それから、私ども、大学の教官の中でも、今年に入って教授会で、僕がこういう研究をしているせいか、「中学、高校時代にどうなっているのか知りたい。」と言い出した教授が私どものところでは増えております。結局、これは一般的なモラルのところでは影響を与えていく

ことについて非常に心配してしまっていて、それは少なくとも減っているわけではないという確証は得ております。また学校によって差があるだろうということもわかってきました。

結局、これは今後、何をやるべきかというところにつながっていくと思うんですけども、このメディアの威力、産業社会に主として与える威力を考えると、いつかの時点で、携帯電話であれ、特にパソコン関連、インターネット利用を子どもにさせないわけにはいかないとは個人的に判断しておりますし、それは大方の社会のコンセンサスだと思うんです。そのときに、このメディアの特徴から言えば、都合が悪いからといって、法的規制だけでこれが解決するものとはとても思えないです。ですから、上から法的な方法でやることはどういうことなのか、それができる前提としてどんな条件が必要なのか、市民社会として何をきちんとやらなきゃいけないのか整理をしながら考えなきゃいけないとは私思っているんです。ほっておけばだれもお上がやってくれるだろうと思ったら大間違いだと私は主張しているんですが、ちょっと質問の趣旨からずれてしまったようですが、非行、犯罪もさることながら、校則違反も含めて、日常的生活の乱れから出てくる子どもの問題に目をむけなくてはならない。学校、特に校長先生からのご相談が最近私のところには多いんです。この変化に注目しております。学校管理上、多分、困っていらっしゃるんだろうと思うんです。子どもたちが、ちゃんと市民に向かって成長していく場所というのはやっぱり学校ですから、学校での影響についてきちんと実態を調べ、議論をし、そこできちんと対応することが、ひいては、犯罪とかニュースになって上がってくる分ですね。氷山の頂点の部分への対応にも影響してくると私は思っております。

【座長】ありがとうございます。非常に大きな問題というか、多層にわたる多面的な論点で、今日はそれを全部切り分けてどの問題というふうに申し上げないし、全部引っくるめて議論するというのもしないで、まずは、今の子どもたちをめぐって、特に携帯の現状を認識していただいて、それで、またこの次からの議論につながるよということでもいいんですが、今のご指摘、非常に重要だと思います。

【A委員】C委員の発言に一部かぶっているところがあるんですけども、先ほどのようにすごい映像や情報なんかを見せられると、とにかく警察で何とか取り締まってほしいという心境になりがちですが、何でもかんでも警察をお願いします、当局やってほしいといういわゆる警察依存、当局依存みたいなそういう方向になってしまっはまずいなと思うわけです。やはりこの問題というのは、例えば、表現の自由とか、そういうことも関わってくるような問題ですし、先ほど魚住先生のお話の中にあっった、やっぱり根本の一

番問題は家族のところにあるとか、そういうところを追及するのは非常にしんどいものですから、とにかく現象面だけを何とかしてくれということにならないようにということに相当注意しなければいけないと思うわけです。ただ、幾ら表現の自由があるからといって、あのような映像がいいのかどうか。これは例えば、先ほどおっしゃったように刑法上の問題があるとか、名誉毀損とか、わいせつ物の問題だとか。ところが、F委員が多過ぎてどうしようもないとおっしゃいました。ということは、つまり、それに対する対策の人員をふやせば、今の枠組みの中でもかなりの対応ができるということなんではないでしょうか。

【F委員】まず、今、違法として捜査をすべきものをすべて捜査するには、おそらく不可能だと思います。そのための人員を万を要する警察官も必要だと思います。

【A委員】ただ、幾つか典型的なものをやることによって抑止効果というのでも出てきますよね。そのことも含めてどうでしょうか。

【F委員】私どもが摘発している事件の中で抑止効果のあるものもありますけれども、持たないものも多い、むしろそちらの方が多いのではないかと感じています。

【B委員】今のと少し関連するかなと思うんですが、先ほどの魚住先生のお話の中にあっただ根本的な家族の問題とか、学校の問題というものと、目の前の具体的な規制をすべき範囲というものの線引きみたいなものをこれから徐々に考えなくてはいけないのかなと感じています。先ほどのいわゆる有害情報の面というのが1つありましたが、もう一つの面についてちょっと教えていただければと思います。つまり、交遊関係を携帯のメールでやることについてです。これは私の個人的なことなんですけども、めいと話をしていると、ずっと携帯を気にしながら、私が食事をごちそうしてやっても、ずっと机の下の携帯を見ているのです。これが実際、自分のめいながら、目の前の私との会話がどこかに行ってしまうと、携帯の方を気にしている。先ほどの50通以上の中に、うちのめいも入っているかなと思いつつ聞いていたんです。

それは自分にも言えることでして、私自身携帯を持っていると、会議中にも、メールを見てしまい、ちょっと用事が来ていたら、下で親指でやっているとかあるんです。つまり、そういう成人のメールの持ちようとか対応もあるわけで子どもたちに対するメールの与え方の問題、とくに交遊関係の方について伺いたいですけれども、そこら辺についてどこかブレーキってかけられるものなんでしょうか。そこら辺のところはどうお考えか、ちょっと教えていただきたいんですが。

【ゲストスピーカー】交遊関係のところのお話に答える前に、メールがバンバン来ます、

食事中もやっていますというお話のところはちょっと触れたいと思うんですけども、小さい子どもたちとワークショップをやったりすると、非常に子どもたちの処理能力自体がマルチタスクになっているというところがあると思います。私は、昔から親に、食事を食べるときにはそれだけにしなさいという形で怒られたりしながら、わざとある1つのことに専念するというようになってきたと思うんですけども、純粋に子どもたちをどう見えるかという、中学生ぐらいから下は、何かやりながら、音楽を聞きながら何かつくとか、そういったところにはたけていて、そういう特徴と能力があるという面は確かにあると思います。1つずつをとってもシングルタスクの大人より優れていたりします。新たな情報環境で能力をきちんと伸ばしてあげることが重要です。この面に限っては大人の先入観をおしつけても展望は見えてこない。

ただ、一方で、携帯電話の利用時間と利用期間というのは実は非常に関係性があるって、携帯電話を持ってすぐの子どもたちの方が利用時間もおおむね長いといったような傾向があります。最初、長いんですけど、実はだんだん減ってくるんです。また、新しい機種に買いかえたときに、新しい機能がついているので、また利用時間とか利用のボリュームが増えるという状態になっていて、おそらく多くの子どもたちというのは、先ほどのメール50通といったような世界にいったんは入るものの、ほとんど抜けていくんだと思うんです。ですから、先ほどのF委員の話にもかぶるところがあるかもしれないんですけども、私たちがウェブ等のアンケート調査をかけるだけでは、実は犯罪にかかわりましたといったような子どもたちをほとんどピックアップできない、サンプルとして抽出できないといったようなところで、割合としてはおそらく少ないだろうと。ただ、重要だと私が考えているのは、むしろ利用初期がヘビーユーザーになりますので、そのときにはまっとうしてしまうといったようなことには非常に注意する必要があるんじゃないかと考えています。

【ゲストスピーカー】先ほどからのご質問にありましたメディアの悪影響についてですが、今回の調査で保護者に質問しているところでは、「とても影響を受けている」と答えた保護者の割合は3.2%で「やや受けている」と答えた割合は2.4%、「あまり受けていない」と答えた保護者は55.9%、「全く受けていない」が16.5%ということで、比較的悪い影響を受けていると感じている保護者は少数派ではあったんです。あまり危機感を持っていないということがわかったんですけども、3時間以上、ゲームやネットをしている子の保護者では、「とても受けている」と答えた割合が16.7%、「やや受けているが」31.9%ということで、悪影響を感じている割合が高くなるわけです。なので、利用状況によ

って意識に大きな差があるということがわかりました。

実際、子どもたちを見ていて感じることは、多くのあまり悪影響を受けずに上手につき合えている子どもたちもいれば、非常に悪影響を受けてどんどん変化していく子どもたちというのがあります。先ほど、メールを使い始めたころに非常にヘビーな使い方をしてしまうというふうにおっしゃいましたけれども、そういうこともありますけれども、実際、長期的な利用の中で、ポイントは現実場面できちんとうまく対応できて生活できているか、もっと言えば居場所があるかということですが、学校、家庭に居場所がある子どもというのは、比較的落ち着いた利用ができます。でも、先ほども言いましたように、子どもたちの学校での生活というのは非常にうつろって不安定な対人関係がありますので、何かのときにそれで傷ついて、傷つきを回復できなかったときに、以前でしたらそこで何かを学んでいけたんですけども、今はゲームやネットやメールをやるといった、より身近に自分の居場所になる、なれる存在というものがありますので、そちらに依存していきやすい現状がある。そこで、ものすごく短期間で変化している子どもたちの姿に、私は危機感を覚えています。

【座長】ありがとうございました。私も素人というか、今日の話でもよくわかったんですが、メールとゲームの問題性というのは大分違って、今日は主に携帯のメールの話なんです。ただ、いずれまたつながってくると思うんです。メールをやっている人は意外に社交的で、要するに引きこもってニートにつながるとか何とか、私は非常にワンパターンのイメージを持って、バーチャルな世界に引きこもっていくとそうなっちゃうみたいなどころがあるんですけど、それは分けないといけないということですね。

【ゲストスピーカー】そうなんです。どのツールかによって、子どもの特性もありますし、もともとそういう特性を持っているからそういったツールにのめり込みやすいといったこともあるかもしれませんが、それをやることによってさらにその傾向を強めてしまうということが感じられます。

【座長】そうですね。さっきご指摘があった因果性、どちらが原因で、という。そういう人だからやるようになるのか、それをやったからそうなったのかという問題も含めて、次回以降、きちっと深めてはいかなきゃいけないと思います。

【D委員】携帯の影響とか問題性とか、そういうことを研究テーマにしている人間ですので、ひとつ私の認識を申し上げたいと思うんですが、これは前回も申し上げた話なんですけれども、携帯の問題というときに、やはり悪用の問題と悪影響の問題に分かれるという

ふうに認識をしております。

悪用でありますけれども、悪さをしようとする意図を持った人のツールとして使われて、その結果として問題が起きるというもので、出会い系サイトを中心とするセクシャルプレデター、すなわち小児性愛者の行為であるとか、詐欺とか詐欺商取引、薬物とか爆発物などの情報発信や利用、こういったものが含まれてくると思うんです。携帯があることによって、悪さをしようとしたときの手段の選択肢が増えているばかりでなく、C委員がご指摘されましたように、携帯は、ダイレクトコミュニケーションなどの問題もあって、手段としても強いものに思われます。ですから、これは実証しなければいけないようなレベルの話ではなくて、この点での問題性については、私は認められるのではないかという認識をしております。これを疑うのは懐疑的過ぎるように思われます。

一方、悪影響の方ですけれども、これは携帯によって問題のあるようなパーソナリティが形成されるかどうかということであり、実証が必要な問題であると考えておりますが、私の研究分野では、実際には、この影響を実証するデータはあまり出ていない状態にあると思います。ただし、比較的根拠があると思うのは、人間関係のあり方を変えていることで、とくに選択的人間関係というものについてであります。かつては全人的人間関係、すなわち、いろいろな側面を含めてある特定の人とつき合うという関係であったのが、携帯によって専門分化が起こって、こういう活動や趣味についてはこの人、こういう活動や趣味については別の人というふうに分けられていることが指摘されています。こうした人間関係を選択的人間関係と呼んでいるのですが、ただ、それがいいと言えるのか悪いと言えるのかは微妙な問題だと思います。ですから、先ほどもご指摘がありましたが、携帯によって引きこもりを生じるとかいう話は特にございませんし、少なくとも私は特にはっきり悪いと言える悪影響を検出したという研究結果を知らないわけでございます。

ただ、これは、携帯の影響が究極的にないということでもありません。実は、日本は、携帯について技術的に世界の最先端を走っていて、世界では日本ほど携帯の問題が生じておらず、その結果、研究の関心も低い状況があります。そのため、携帯の研究は非常に少ない状況があって、そのため、未検討でわかっていないことが多いというふうに言えるんだと思います。先ほど魚住先生のお話で、不安定な人間関係と携帯利用というのは相関関係であって、どちらが先にあるかわからないというお話をされました。私はそれは正確なご議論だと思うんですけれども、その後で因果関係の議論に移られたことについて、ご質問させていただいたのですが、基本的にはご経験された事例を根拠の一部としてそれを導

かれたということだったように伺いました。もちろん、事例というのはばかにはできない話だと思うんですが、私の分野ですと、そのあたりの因果性を実証するような客観データというのがどうしても必要になってきます。そのため、1回だけの調査ではなくて縦断的にデータをとって、それに対して一定の分析を行って、因果関係を立証していくということが必要になっていくわけなんですけれども、携帯については、そうした因果性まで踏み込めるようなデータが現在のところ少ない状態にあるということでございます。

このように、携帯の研究が少なくてわからないことが多いということで、あえてほかの分野から携帯の問題を類推してみるとしますと、例えば、インターネットについて、限られた人ではありますが、中毒が起こり、社会生活がまともにならないという深刻な場合もあるとされます。特にオンラインゲームでその問題性が強いのではないかという議論もありますが、携帯についてそれと同じことが起こってくるのかどうなのか。ただ、携帯はどこでもオンラインゲームができるという点で、使用の長時間化を促す面があるかもしれない一方で、携帯では画面が小さかったり、PCと比べるとやや使い勝手が悪いかもしれじ、その点で求心力はそれほど強くないのかもしれないかもしれません。これらを含めて、結局、どれほどの影響があるのかが研究の論点になってくると思います。

それから、暴力シーンとか暴力情報について、とくに暴力を肯定するようなものがあれば、それは従来からテレビの研究など言われているような影響があり得るのかもしれないとか、同様に、残酷なシーンを小さな子どもが見ればトラウマになるようなことがあり得るのかもしれませんが、それもやはり、携帯には非常に過激なシーンや情報があるという一方で、画面が小さく、インパクトが小さいようなこともあるかもしれないので、そうした点を含めてどうなのかということで、やはり研究をして結局のところを明らかにする必要があるのではないかと思います。

【H委員】今、おっしゃられたD委員の悪用論と悪影響論。それは分けるべきじゃないかと。分かれるという部分があるんですけども、実際のケースで見ていく場合に、これはなかなか明確には分かれな部分があると思うんです。どんな道具でもそうですけれども、その道具を使い始めたとき、最初は、自分はその道具を使いこなしている、その道具をただ利用しているんだという意識でやっているわけですけど、いつの間にか道具に使われているという状況になることがあるわけです。特に依存性を持ったものとか中毒性を持ったものではそれが非常に起こりやすい。例えば精神安定剤、抗不安薬を飲めばすごく楽になる。つまり、これを飲めば自分は楽になるということで、うまくそれを利用しているんだ

と思うんだけど、そのうちだんだん、それにどんどん頼って行って行動に変化が起こると
いう現実があって、D委員がご指摘のとおり、依存性の問題ですね。

例えば、ネット依存なんかの場合ですと、やはり行動に変化が起こるということがいろ
いろな研究で指摘されています。依存症状が深くなるケースではいろんな問題が出てくる
わけですね。それと同じように、携帯メールというものがどの程度の依存性があるのかと
いうのが、オンラインゲームとかインターネットに比べると軽微なのかもわからないけど、
それ以上に、メールというのは外の世界につながっている、それから、最近はメールの機
能だけでなくネットの機能もあわせ持っていますので、あるいはゲームもできるとい
うことで、オンラインゲーム的に使っている場合もあるわけです。そういう意味で、どん
どん、どんどん依存性を増す方向に来ていることは間違いないと思うんです。

だから、それが十分自己抑制のかからない子どもが利用した場合、どんどんエスカレー
トしやすい。大人だったらそこまでは行かないような利用になっていく。現に、私なんか
が見ている社会で破綻したケース、特に遊び型非行と言われている場合、その多くの場合
は魚住さんが言われているような愛情飢餓みたいのがあって、家庭で自分の支えが得られ
なくて外に求めようとする。そういう中で売春とか薬物とか、そういう犯罪を犯してしま
うと。そういうケースでは、最近ではそういうケースがわりあいしっかりした家庭の子に
も起こることが多くなっているんですね。そこが何でだろうというのを考えた場合に、以
前だったらしっかりしている家庭の壁をぶち破ってしまっているのが、メールとかそうい
うツールじゃないかなと。以前だったら、お父さん、お母さんがある程度しっかりしてい
て、守ってあげられていたのが、ちょっとしたすき間からそういうものが入り込んできて、
その子が自立の時期を迎えたときに、親子関係ですからパーフェクトな親子関係というの
はありませんので、何か不満を抱いたときに、外にそのはけ口を求めようとして、そこで
危険な大人に出会ってしまうというケースがあるので、その意味で、メールというものは、
特にまだ外界の危険に対して十分な備えを持っていない子どもさんが使われる場合には、
非常に潜在的な危険があるというふうに思います。

【I委員】実証データに基づかない、臨床治験に基づく話で申しわけないんですけど、お
話を伺っていて、メールは女子の非行、女の子というイメージがすごく強くて、ゲームと
かにはまっていくのは男の子がすごく多いんですね。例えば性的逸脱行動を見ても、女の
子だと援助交際だとか、関係性を求める非行に走っていきますし、それは携帯メールがず
ごく重要なツールになってきます。男の子の場合は、インターネットを見たりゲームをや

ったりして、自分の性衝動の中にはまり込んでいって、それを性暴力として行動化していく。両方とも衝動コントロールの問題なんですけれども、男女の差がそのあたりで結構出てきているところなのかなという印象はあります。

ちなみに、去年、女子の非行少年の友達の数というのを調べたことがあるんですけども、1つおもしろかったのは、数人という少ない数を言う人もいるんだけれども、50人以上、100人以上、多過ぎて答えられません、数え切れませんという一山があって、それを平均にしてしまうと全く意味をなさない二山の分布になるんです。友達の数というのは、女子非行少年の年齢が上がるにつれて落ちていくんです。減ってきて、そこそちゃんとつき合えるぐらいの人数になるんですが、女の子の親友と友人の数は年齢が高くなると減ってくるし、男の子の親友も、年齢が高くなると減ってくるんですが、男の子の単なる異性の友人というのだけは、年齢が増えても減らないんです。それは同性の友人だとか異性の親友と別の動き方をしているんですね。

そして、皆さんご存じのことだと思えますけれども、女子非行の特徴というのはセックスと薬物でほとんどが押さえられてしまう。そうすると、今どきは高校生で4割が性を体験していて、10代だったら7割が体験しているので、10代の性行動というのが、10代の子どもたちの中ではおじさんたちが幻想を抱くほどには特別なものではないとは思いますが、関係性の持ち方、魚住先生のお話の中で、1日50通以上のメールのやりとりをする子どもたちの対人関係の持ち方というのは、実証的には言えないんですけども、相関関係でしかないんですけども、やっぱり違うものがあるんじゃないかなというふうにお話を伺っていて思いました。

それで、こういう子たちというのは、別に携帯メールがなくても昔から一群がいたんですけども、これがメールがなかったらどうだったかという、新宿とか渋谷とか、そういう繁華街に出かけていって、不特定多数の異性とつき合うようになると非行がダーッと拡大するわけですね。そこまでには幾つものハードルがあったんですけども、携帯メールを使うことによって、C委員のお話のように迷い込んでしまっただけで一気に広がってしまって、そういう意味では拡大には大きな影響があるんだろうなというふうに思いました。だから、使う側の個人の問題を教育だとかで手当すると同時に、やっぱり簡単には近づけないような外的なコントロールの方法というのと、両方から攻めていくのが一番効果があるんだろうなと思いました。

【C委員】D委員の発言にも関連することで、もう少し。1つは、今回の研究会で特に強

調したいと思っていますことは、みんな使いなれている携帯電話というメディアのメディア特性が、案外よく考えてみると、いろんな子どもの起こす問題を整理しながら考えていくと、恐ろしく底が深いものであるということが言えるのではないかと私は思っています。

問題は、そういうメディア特性がつかみがたいものになっている理由は何かというところ、やはり技術の進歩がすごく早いということだと思えます。これは失礼ながら、携帯電話会社の社員の方とお話をしている、えっ、こんなこと知らなかったのということを確認することがこの5年間出てきまして、もしこの技術進歩の先にどういうことが起きるかということ、メディア特性をつかんで設計していれば明らかになるようなことも、そのまま現実社会にどういう影響を与えるかもわからずに出されてきている面が非常に多い。したがって、消費者、ユーザーも、特にお父さん、お母さん方はその辺がわからない。そこに大きな特徴が、問題の根底にあると私は思っています。

その上で申し上げますが、1つは、D委員がおっしゃる悪影響と悪用の問題なんですが、携帯、インターネットの進化の結果、情報収集等によって悪影響を受けて、従来のマスメディアの時代であれば、これを行動に移す　私はドゥーイングとプランニングと分けているんですが　行動に移して悪用するという間にハードルがあったんですが、このメディアは明らかにハードルを低くしています。技術による機能追加がそれを促しているんですね。

その点でさらに言いますと、今ゲームのことで、携帯からのゲーム利用と、パソコンとは違うのではないかとおっしゃっているわけですが、私は、これは技術の先を読むとこれは連動してしまっていて、現実には、子どもたちは外で暇なときはこのゲームをやる。ある種のゲームはパソコンでしかできないので、それは家へ帰って改めてデータを入れ直してやるとか、常に連動させているんです。スタンドアローンの機器と、どこでも使える、時間・空間に制約されない使い方の組み合わせをうまくしている。このことを視野に入れながら考えなきゃいけないなと。つまり、メディア特性について、我々研究者の方が技術進歩に追いついていないかもしれない。それが1点です。

それから、このメディア特性については、実はいろいろ考えていきますと、大人の側が子どもたちに学ばなきゃいけないなと思う点があるんですね。学ぶというよりは、僕がこの研究を始めたのは、先生、こんなことを許していいんでしょうかと、子ども自身、学生自身が僕に言ってきたことなんです。例えば、自殺系サイトを見た学生が怖かったと。

でも、親や先生には相談できない。相談しても話が合わない。だから、それを知っている大人として、先生は研究者だから答えてくれとってきている。子どもたちは、進化が速いメディアを手にしたことによって、結構疑問を持っているんですね。それは私どものいろんな調査ではっきりしています。インターネットとは何かメディア・リテラシーを勉強しないまま、体験的にいろいろ使っているうちにぎょっとする情報が次々入ってきて、何で大人や先生は注意しないんだろうと疑問をぶつけてくる。それに対して、大人が逆にきちっと腹を据えて対応しないとイケない。この機会をどのように逆手にとれるかということが非常に重要だと思うんです。

例えば、マルチタスク、それからある方がおっしゃった選択的人間関係、これは両方もが携帯、インターネットというメディアの効果なんです。これを子どもはあるときメリットとして使っているが、あれ、変だぞと思うときに聞いてくるわけです。聞いてきて答えられないわけですよ。どういうことかといいますと、例えば、選択的人間関係というのはやっている子どもはわかっています、そんな専門用語じゃなくても、これでいろんな友達をつくって、そして嫌になったらすぐ切っていく。やっていて最初は便利だと思ってやっていくうちに、あれ、先生、人間関係、こんなことでいいんでしょうかって聞いてくるんです。そのときに僕らがちゃんと答えていないということが1つあるのではないかと。

それからもう1つ、マルチタスク、これは言いかえますと、アンケートをとりますと、中学校、高校で先生の授業が退屈だからやっているとか、いろんな理由をかけて授業中に携帯を使っているわけです。でも、それを絶対に悪いことじゃないと言い張っている生徒、学生の言い分を聞いていますと、このメディアのメリットを生かしているだけなんだと言う。つまり、1つのことをやりながら、授業を聞きながらいろんなことをするのは当たり前であると。特に先生の講義がおもしろくなければ自分に有用な情報をとったっていいという理屈になるんです。これはマルチタスクですから。しかし、ほんとうにこんなことでいいのだろうかという、体験的な利用の中から生まれた不安疑問もあるんですね。これに対して、どうも見ていると、私も含めて、それはイケないとちゃんと学生に理由を説明していない。つまり、このメディアの技術革新のスピードは、かなり速くて広範なので、携帯電話会社の社員の方も含むメディアリテラシーが必要だと私は思っています。

【J委員】皆さんのお手元に、17年度の「子どもとメディアに対する意識調査 調査結果報告書」をお渡ししています。今回の場合ですと67ページから、今日お話をいただいています携帯電話、インターネットの利用状況と課題ということで、調査、報告をさせて

いただいております。C委員がおっしゃっていただいたような、保護者として何をしなきゃならないのか、また、どのような状況なのかを、今回は流れをつくっていくというつもりで意識調査をしたのですが、できてみた結果から見ると、自分なんかの知りたかったことをまとめて皆さんに質問してしまったのではないかというようなデータになっています。

その中で、非常に新鮮で、今までのお話をいただいた中で1つ1つ当てはまることの数字だけを申し上げていきますと、インターネット、それから携帯電話についての家庭内の子どもと保護者のルールがあるかということ、子どもの70%はないと答えています。ところが、保護者は子どもとのルールはないと思っているのは48%ですから、子どもと保護者との認識のずれは約20%以上あって、子どもの方が親とのルールはないんだというふうに考えています。親の方が子どもとのルールに対してもっとまじめにあるんだと思っておりますが、実際はそうでないというのが今回の意識調査の中に出てきております。

それと、今回は携帯電話というのはみんなどのような形で認知されて利用しているのだろうかということの具体的なデータを調べて掲示をさせていただきました。これは今回初めてのことなのですが、いかに多くの内容を子どもたちが理解をして、これを利用するような環境にあるかということが数字的によくあらわれておりますので、ごらんいただければ、今日のお話の内容が確認できるような数字ができていないかなと思っております。

幾つかの数字を具体的に申し上げますと、今回、今の学校に携帯電話を持ち込むことに対して、保護者、子どもがどういうふうに思っているのかといいますと、全く反対の考え方で、親は、持ち込んでもいいと思っているのは最低でも23%程度なのです。ところが、中学2年生になって、学校への持ち込みについて、持ち込み禁止に反対かどうかと聞くと、50%は反対、要は持っていきたいと言っているのです。ですから、保護者の意識と子どもたちが持っている意識が全く違う状況で、これをまた裏から考えれば、こうやって言葉で反対だと言っているのは50%ということは、大まかの携帯を持っている子どもたちは、みんな学校に持っていっちゃおうというのが、実際、読み取れるのかなというふうに感じている数字であります。ですから、この辺を先生方によく読んでいただいて、今、私どもの保護者が子どもたちに対してどのような意識を持って、また、ギャップがあるのかをごらんいただければ幸いかなと思っております。

それと、今回メディアリテラシーについての調査をさせていただいたんですが、一番明

確に数値として出てきたのは、このリテラシーの中の内容としては、機械をどうやって使うのかということについての教育が先で、それから得られる情報についてのメリット、デメリット、要は自分でどう考え、また、それをどう利用して自分の活動、社会の活動、生活に利用していくのかという深いところまでについての教育が得られていないという情報が、数字でよく読み取れます。それとまた、この情報からでは読み取れない部分のところもあるのですが、どのような方が教えていくのかということについての明確なルールが、まだ保護者も、また社会も、子どもたちも、十分にそれを認識して道具を使っていないというふうに、今の状況としては読み込めるような状況になっています。

あともう1つは、保護者の心配は結果としてどういうものが出てきたかということ、先ほどお話をさせていただいたのですが、これもストレートなことなのですが、心配な点は、無制限に使ってしまい、使用料金のむだ遣いが一番心配だというのがサンプルの50%あります。これは現実的なこととして、あとは、子どもたちの交友関係がわからなくなるという心配を35.4%、それから、犯罪に巻き込まれる可能性が高くなるということで32.7%という数字で保護者が現状を認識しているのが、私どもの意識調査です。今日、幾つもお話いただいたことをこの中から読み取っていただければ、私ども保護者がどのような状況にいて、子どもたちが携帯電話、またインターネットを利用しているかというのを読み込んでいただけたらと思います。結論から申し上げて一番心配なのは、中学生の答えのなかにインターネットを使用するにルールがないというのが70%もあるというこの事実を、どのようにPTAとして又保護者として共有して、この現実をあらためていくのかを問われていることが今回の数字の中で一番感じたことであります。

【座長】ありがとうございました。これは非常に標本の数も多いですし、非常に重要な資料だと思います。

【A委員】ルールがないといわれましたが、ある程度知識がないとルールはつくれないと思うんですね。先ほどのどなたかの発表の中でも、親よりも子どもの方がたくさんよく知っているというようなことがありましたし、それから、先ほど魚住先生のご指摘の中で、親の方に現状の危機感がないと。危機感がないというのは、多分知識としていろんなものが伝わっていないんじゃないかなというふうに思うんですね。

ゲストスピーカーあるいはG委員もそういう情報とか知識、あるいは経験をお持ちでしたら教えていただきたいんですけども、親の方に実態を伝える努力を現場の方でしているという事例があるんでしょうか。あれば、どういう取り組みをしているかというのをご

紹介いただければと思うんです。いくら情報を流してもそういう場に来ないとか、受け取らないという家庭の方にむしろ問題があるということなのかもしれないんですけど、H委員のお話だと、しっかりした家庭の壁さえ破ってしまうということなので、情報が親のところきちっと伝わっていくと、その家のルールづくりだとか、あるいは親が子どもを指導するというのにかなり貢献するんじゃないかなと思うんですけど、その辺、現場の状況を照らしていかがでしょうか。

【ゲストスピーカー】親だけではなくて先生もなんですけども、実際、持ち込んでいるのを知っているのに、なかなかそこに踏み込もうとしない。先ほども言いましたけれども、君たちは持ってきていないことを信じていますなんて堂々と先に言っちゃって、でも、持ってきているのは明らかなわけですね。見ようとしませんね。性問題でもそうなんですけれども、いろんな性のトラブルがあるにもかかわらず、そういったことに真正面から向き合うのになかなか抵抗があるという、大人側の抵抗感というのを感じます。家庭においても、うちの子は大丈夫だろう、あるいは、この携帯を持っていることによって連絡がとりやすいから安心だという感覚の方が強いように思います。今回の調査結果は、保護者向けにもお知らせさせていただいていますが、データを見てもあまり自分のこととして感じてらっしゃらないなということが、そこから影響を受けて、子どもの問題で困ってらっしゃる方は深刻に考えてくださるんですけども、そうじゃない、全体的、一般的にはあまり危機感がないんだなということを感じています。

先ほどのメディアリテラシーも、だれが教えるのかというところでは、ちょっと話が、先ほどの質問になりますけれども、学校の技術家庭の先生が、パソコンの授業がありますので、その中で教えていらっしゃったりということが実際あります。

【G委員】実はこの1年で、横浜市内ですけども、数十校の学校を丸1日回りまして、生徒、それから保護者、そして先生方と、現実に行っているさまざまな教育問題について議論し、考えてきました。その中でこの携帯電話の問題は特に出てくる問題なんですけれども、ある学校でこういうケースがありました。

うちは、とにかく以前は携帯電話の問題がすごかった、大変でしたと。だから、PTAと連動しながら、家から持ってこさせない、学校には持ってこない、そして、放課後に塾とかがあって持ってこざるを得ない場合は、担任の教師に預けるという指導を徹底してきたと。結果として、今、ほとんどの生徒が持ってこない、あるいは担任に朝預けるようになったという、まず最初に学校長の携帯電話に対する報告があったんです。お昼休みに、

私が生徒たちと交流しようとして廊下に出ていくと、ああ、ヤンキー先生だとみんな集まってきて、携帯電話出して写メール撮っているんですね。持ってきてるじゃないかと。

つまり、親も教師も、現実にはわかっていないという部分もあるんですね。没収されますから、先生の前で携帯電話なんて、授業中出す子は少ないですよ。むしろ休み時間にやっているんですけども、どこの学校でも休み時間の教室に教育者は介在していないんですね。そこが意外とフリーゾーンになっている。親御さんに、なぜ学校からそういう指導があるにもかかわらず、持ってこさせているこういう現状があるんですかと、同じ学校の保護者の方に聞いたんですけれども、そしたらこう言うんですね。初めは確かに意識して持たせないように声をかけていたけれども、結局、教師によっても線の引き方が違うと。だから、注意する先生がいたり、見逃す先生がいたり、この子たちは持ってきても注意されなかったりということで、いつの間にか崩しになりながら、いけないとわかっている、持っていったらだめよって言っていない自分がいますというような、非常に正直な答が返ってきたんです。だから、この問題は確かに学校側もチェックのしようがない部分、昔みたいに荷物検査なんてなかなかできるような状況にないですから、親の側も、子どもが持っていつているのか、持っていつていないのか、朝の忙しいバタバタした時間の中でチェックし切れていない。それが学校に蔓延しているような気がするんです。

自分自身、携帯電話の影響を考えると、実は子どもだけじゃなくて自分にもすごい悪影響があるなといつも感じるんですけれども、もともと短気な人間なんですけれども、以前に比べてより短気になったような気がするんです。結果をより早く知りたくなった。要するに、以前だったらもう少し待とうと、公衆電話を探すよりももう少し待とうという自分がいたのに、今はすぐ知りたい。つまらない話ですが、おととい、息子が水ぼうそうの可能性があったんですね。私は仕事で別の県に行っていたんですけれども、心配で心配でしようがない。仕事が手につかないんですよ。でも、連絡しても彼女は携帯が壊れていたと言いわけたんですけれども、連絡がつかないんですね。どうしようもない中でメールぐらいできるだろうってどなりつけて大げんかになったんですけれども、これもまた、携帯電話があることの影響というか、仕事に出ているわけですから、ほんとはなかったらわからないわけですよ。ずっと後でお互い電話がつながる状況になるまではわからないことが。

これは実は子どもも一緒に、裏切られた、もうあの人は信じられない、何でって聞くと、非常に簡単なことで結論が出ている。やはり悪影響という意味では非常に短絡的に、私自

身のことも含めて人間の思考を短絡的にしてしまっている。それから、プロセス抜きの結果重視主義を助長している部分が、少なくとも自分自身には当てはまるかなと。そんなことを感じます。学校だけ、あるいは親だけではどうしようもないような問題があるような気がします。

【E委員】私も教育に携わっている人間としては、非常に多くの場でこういった問題について、保護者向けなり、教師向けなりに話をしてくれという依頼がここ2、3年あります。おそらく、ご関係の先生方もそういうご依頼って多いと思うんですね。ですから、学びたいという意欲を持った方はかなり増えているんだと思います。

ただ、どういうことを言わなくちゃいけないのかということについて、まだ何を言っているかというのはわかりませんよね。危ない、危ないって話だけしても、どうしていいか指導できませんから困りますので、教育的に考えますと、1つのポイントは、あまり愚かなことさえしなければ大丈夫なんですよというぐらいのところ子どもが納得できる、そういうラインが見えるといいと思うんです。この携帯の問題については、ネットの向こうには悪い人がいるかもしれないというのが1つポイントだと思うんです。だれがいるかわからない、悪い人もいるかもしれない。もう1つは、コミュニケーションがほかのメディアと大分違って、スピードも速いし、文字が多いし、時間も限られないという、メディアとしての特性ですね。まさにこういうのを知るのがメディアリテラシーだと思いますけれども、この2点、悪い人がいるかもしれないというのと、今までのメディアとは大分違う特徴がある。この2点を押さえて常識的に使えば、そんなにおかしなことは起こらないでしょうということであれば、まあまあ納得ができる場所なんだと思います。

もちろん、これについてはもう少し具体例を通して授業をやったりしなければ、なかなか納得できない部分はあるんですけども、こういうものがわかるような、NTTドコモさんたちも今日パンフレットを配っていただいていますけれども、パンフレットがあったり、私はNHKの教育テレビの番組にかかわっておりまして、ドラマを見てもらって携帯のトラブルに陥る少年少女を見ていただき、それについて議論できるようなものをつくっております。そういうものが増えていけば、指導もしやすくなるのかなと。ただ、どの時間でやるのかというのは学校では非常に難しく、先ほど、中学の技術科というふうなお話もありましたが、必ずしも技術科の教科書にきちんと載っているわけではないわけですね。あるいは、国語や社会科でも近い内容はあるんですけども、インターネットや携帯のトラブルを直接扱うような内容というのはまだまだ不十分だということがございませ

て、そういうことの整備が必要なのかなと思います。

もちろん、こういう指導をしていっても、あえて愚かなことをしてしまう子どもというのはいるわけですね。これはいわゆる非行ということになるんだと思います。そして、非行の垣根が、ハードルが低くなっているというのは皆さんのご指摘のとおりでございますので、あえて愚かなことをしてしまう子どもへの指導というのは、また別の枠組みで考えなくてはいけない。この2段階、一般的な子どもへの指導をするような環境を整えていくという部分と、あえて愚かなことをしてしまう子どもへの特別な指導、この2段階で考えていくといいのかなと思います。

【C委員】私ども、群馬県のIT担当教員の方々の研修会を担当しています。そこで1つはっきりしてきたことは、学校に任せて、特に任せるという場合、IT担当の方がと前面に出てくるわけです。研修を受けられた結果を見ますと、特にインターネットの、トラップと僕は言っていますけれども、その実態についてはほとんど知らなかったとおっしゃっています。子どもたちはここに関心があるわけです。大きなずれがあります。それだけ申し上げておきます。

【H委員】今おっしゃられた、あえて愚かなことをしてしまう子と普通の子と、そこで分けて考えるべきだというご指摘ですけれども、ただ、実際、失敗した子どもを見ると、そこを分けるのは非常に難しいという現状があると思うんです。極めて普通だった子が、いろんなトラップにはまってしまっているというところがあるので、いろいろなリスクを指摘することはできるかもわからないけど、やはり出発点は非常に近いところにあって、ですから、むしろ、どこに視点を合わすかということ、重大な結果に至ってしまうかもしれないという最悪の事態の方に、ある程度そこを考えて対策をいってあげていないと、なかなか防ぎ切れないんじゃないかなと。だから、啓蒙される方がもう少しそこで危機感が必要じゃないかなという気はするんですけど。

【E委員】私の言い方が悪かったかもしれませんが、こうやったらいいんだよということを子どもに教えても、必ずしもそのとおりやってくれない子どもがいるわけですよ。そういう子に対しては特別な指導が要ると言ったわけで、最悪の場合を示していくということは当然必要だと思います。

【H委員】ただ、子どもというのは結構好奇心旺盛ですので、わざわざやってはいけない方に近寄る部分がありますよね。だから、そのあたりでどこまで区別できるのか、線引きできるのかということですね。

【B委員】今のに少しだけかわるかもしれないですけど、去年、私が個人的にかかわった事件ですが、女の子のリンチ事件があったんです。女の子が5人ぐらいで1人の女の子をリンチしたのですが、そのときに、裸にしてかなりひどいことをした後に、それを写メールに撮ったんです。そして、それを流す。つまり今までだったらそこで終わっていた話が、写真を流して、今度受けた子がまたそれを流すということになったのです。だから、同じことでも、今までだったら現場で終わっていた話が、結局、被害者の子からすると直接受けたこともひどいのですが、不特定多数に行くというこわさがあるのです。ここから先の話は携帯のツールの問題というのは非常に大きいなというふうに感じた次第です。

【座長】先ほど、一番最初に出てきた悪用、悪影響、どちらに分けるかというのは、このテーマというか枠組み、またずっと議論になっていくと思うんですけども、いずれにせよ、携帯があって少年たちが犯罪の世界に落ちていくという意味で、ハードルが下がっていくということはかなり共通の議論なんですよ。我々の時代はおふくろが怖くて何もできなかったというハードルがあって、そういうのが携帯があるから弱まっていく。いろんな意味でハードルって常に弱くなっていっている面があるんですけど、この会として何ができるかですね。

(6) 閉会

【座長】今日はもう大体このくらいでまとめさせていただいて、今日は携帯の話を中心にやりましたけれども、次回以降、どのように議論を進めていくかですね。

【F委員】いろいろな示唆に富む情報の提供もございましたし、ご意見もあったと思います。私の、もう少し携帯電話の問題について、整理した考え方をもちたい。というのも、携帯電話が社会全般にとってどういう影響があるのかということは別にして、この研究会のテーマである子どもたちにどういう影響があるのかということに絞って、今の携帯電話が子どもたちにどういう問題をもたらしているのか。その程度はどういうものなのかということ、少し今日の議論から一度整理をさせていただきたいと思います。

結構幅広い問題もあって、非行の問題に影響しているものもあるけれども、大人に対する不信をつくり出しているんじゃないかというような、そういう問題も含めて幅広い指摘があったと思いますので、それを少し、できたら適切な言葉があれば抽象化した形で整理をさせていただいて、それを次回に提示をさせていただきたいと思います。そうしませんと、そこが確定しないことにはどういう対応をとる必要があるのかがなかなか見えてこな

い。携帯電話は全部子どもたちに持たせないようにしようということまで大変な状況なのか、それとも、一部の情報だけを子どもたちにもたせないような仕掛けがあればいいのか、何かそういうところもまだ見えてこない状況だと思うんです。

携帯電話の問題は、今多くの人たちが関心を持っていて、何かしなきゃいけないんじゃないかというふうに世の中の人が思っている中で、この研究会としては、やはり問題ってこういうところがあって、社会としては、ここはこういう形で、ここはこういう形で考えていくべきじゃないかというところが、ある程度のラインが出てくれば、私どもとしても対処がしやすいという思いもありまして、それが可能かどうかは別にして、いずれ今日のご議論の中で問題等を少し整理をさせていただき、委員の方々に次回までにまたご意見を求めたいという気持ちもございますので、ご協力いただければというふうに存じます。座長、よろしければ、まず次回については、今日の整理をまずさせていただいてというふうにお願ひできればと思います。

【座長】私も全く同じ感覚で、今日はランダムにご議論いただいたようで、ある程度収れんしている部分もありますし、何が問題か、もちろん、完全に全員が同じトーンで、同じ意見で言っているわけじゃないんですが、そこのところを整理して、1つは言葉でやり合うだけでなく、議論したものを文章化して、事務局で整理したものをメールで回してご意見をいただく形でまとめるという形で、せっかくここまで議論して、それから今日これだけ情報を出していただきましたので、携帯電話に関してどういう問題があって、それに対してどういう対策が可能であるのか、そこまで行けるかどうかは別として、どういう問題があるのかというのを幾つかの層に分けて提案して、次回、次々回でテレビゲームの問題もそれと並行しながら議論させていただければと思います。

それでは、これで本日の研究会は終わって、次回またよろしくお願ひいたします。どうもありがとうございました。(了)